

くらしと教育をつなぐ

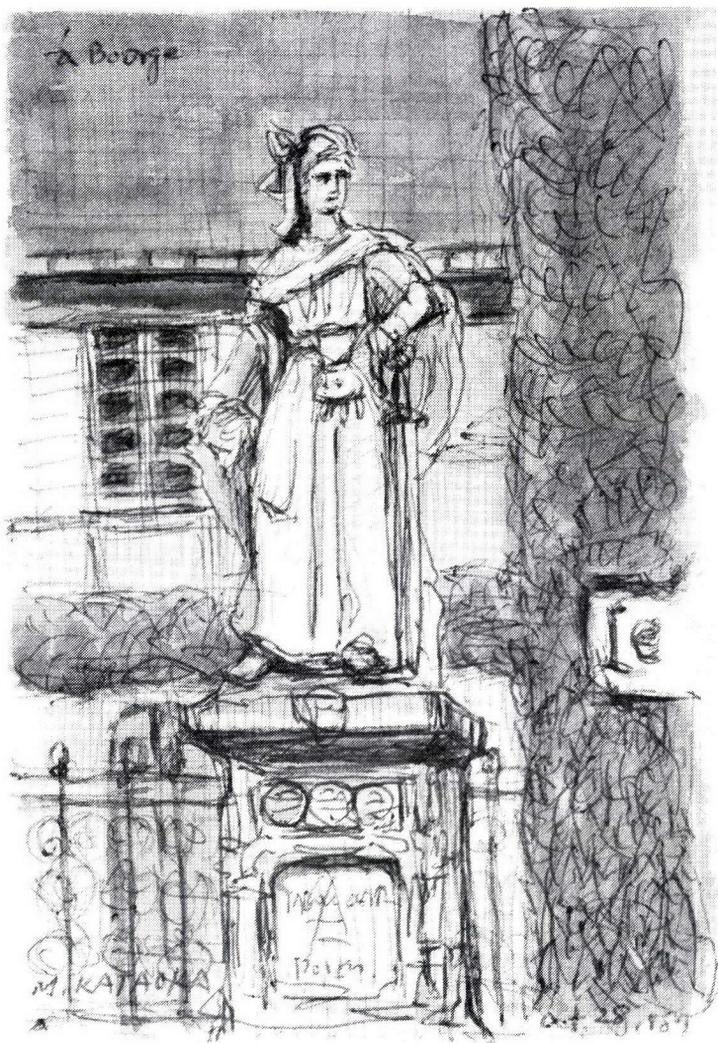
We



女と男の家庭科新時代

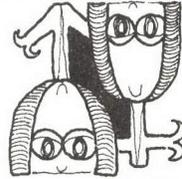
別冊特集 性を語る

1993 11



1993年11月号(別冊特集)

性を語る



- インタビュー 「知識教育」を超えたエイズ教育を 小貫 大輔
(聞き手・まとめ/中村泰子) 2

☆性を教える — 女と男の家庭科新時代

- 私も赤ちゃんば産んでみたか 岡田みつよ 9
- 性の理解から愛の理解へ 田中 裕一16
- 男女共修で「性」の授業を 林 咲子22
- 少女たちのセルフイメージを解き放つ 竹内未希代27

☆性を考える

- インタビュー 「性と結婚」をめぐる民族学的考察 和田 正平
(聞き手・まとめ/稲邑恭子)34
- 性教育とフェミニズム 寺島 紘子40
- あなたの隣にいるレズビアン 秋波水魚子44

☆性を語る

- 座談会 男のセクシュアリティ おとこの性は本能か?
(まとめ/有坂節子・稲邑恭子)48
- 座談会 女のセクシュアリティ 性についてワイワイガヤガヤ
(まとめ/田村 恵)52

L私の本棚から

河村ふみ・中村泰子61

- ◆ 編集後記64



『知識教育』を超えた

エイズ教育を

小貫大輔さん

(聞き手／中村泰子・稲邑恭子)

男女で学ぶ「性」が家庭科のキー・ポイントになるのではないかという声がたくさん寄せられる中で、「知識教育」を超えた「性教育」のヒントを探している時に、小貫さんのエイズへの取り組みに出会った。

セクシュアリティをみつめることを広い意味で自立の根幹と捉え、人との出会いをエネルギーにしてエイズに向き合う彼の柔らかな試みは、とても魅力的。

プロフィール

おぬき・だいすけ。1961年東京生まれ。1984年東京大学英米文学科卒。「少数民族と性教育」をテーマに、1988年に東京大学とハワイ大学から修士号を取得。同年から1990年まで、サンパウロのファベラ(貧民街)で、シュタイナーの思想に基づいた教育、医療を実践するグループにボランティアとして参加。ファベラでのエイズ教育を実現させる。著書に『耳をすまして聞いてごらん』(ほんの木)

■セックスをオープンに語る

稲邑 性教育に関心を持つようになったきっかけは？

小貫 大学で牧野カツ子さんの講義を受けて、「家族」に興味を持ったんです。結婚や子育て、性別役割分業とかね、とても影響を受けました。それで、英文科だったんですが、卒業で家族について考えて、大学院に行く時に性教育をテーマにしたわけです。それから、ハワイで三年間、大学院で性教育について勉強しながら、ソーシャルワーカーとして働き、未婚で子供を産んで、育てながら勉強している高校生たちに接していました。

稲邑 それからブラジルへ渡られたわけですね。エイズに関わるようになったのはどういういきさつで？

小貫 ブラジルにいたのは五年間で、ガセイ南米研修基金というのをもらって行っただんですが、モンチアズールというファベラ（貧困地域）が気になって、ちょっと様子を見るつもりが、ずっと関わることになりました。

その保育園、これはシュタイナーの思想を元にした保育園で、診療所とか、木工場、織物工房なんかがあって、地域の中心になっているのですが、そこで皿洗いなんかしながら、コミュニティの人たちと付き合いが始まって

最初は言葉をおぼえるのだけで大変でした。

88年のことですが、その頃のブラジルは、世界で2番目にエイズがひどい状況だったにも関わらず、エイズの問題はそれほど取り上げられていなかったし、州政府や連邦のやるキャンペーンは貧しい人達には届いていなかったんです。僕にとっても最初は、エイズは切実な問題じゃなかったですね。でも状況を見てみると、貧しい人たちほど、情報もないし、コンドームなんかも手に入らない。こりゃ何かやらなきゃというか、自分でできることを探そうと思っていましたから、ファベラの人たちにエイズのことを知ってもらおうと思ったわけです。

最初の二年間は、試行錯誤でした。いつもコンドームを持ち歩いて、いろんなところで、いろんな人をつかまえては、エイズとコンドームの話をしていました。活動の基盤は保育園。保育園に子供を預けているお母さんというのには、大体15歳から45歳ぐらい、性生活が活発な年齢で、でも、必ずしも夫との安定した関係があるわけじゃないですから、一番、エイズのことを知ってもらいたい人達と言えます。それに保育園の保母さんというのは、母親たちと毎日接していて、日頃から感謝されています

し、その人達と一緒に、地域の女性達に向けたエイズ教育を始めたわけです。

稲邑 準備期間が必要だったんですね。やはり信頼関係がないとできないことなんでしょうね。

小貫 それでも、必要性を理解してもらうのは大変でした。やはり、セックスに対する苦手意識というか、避けて通ってるようなところがありますし、話し出すとみんなゲラゲラ笑ったりしてね。

一年目は、時間をかけてエイズのことを話して、僕も診療所の看護婦さんとセミナーを受けたりしました。そうしているうちに半年もすると、保母さんの中にも協力者が出てきたので、地域でリーダーシップが取れる保育園の保母さんを中心にして、もっと組織だった地域のエイズ教育を考えるようになったんです。

稲邑 どういう内容のセミナーを受けられたのですか。
小貫 僕が受けたのは、州政府のやっていた、保健所の職員やコミュニティワーカーなんかを対象としたセミナーだったんですが、いわゆる、予防教育として知識を教えるんですね。参考にはなりませんが、それだけじゃ何か足りないというか。僕らも最初は、予防教育とい

うか、数字や病気の知識を話すことで、「こんな怖い物が近づいてきているんだ、何かしなくちゃ」という話をしていたんです。でも、聞いてくれた人の数も少なかつたし、それぞれに何が残ったかということには疑問がありました。そういうこともあって、知識やキャンペーンではなくて、日常に根ざした文化的なものが必要なんじゃないかと思って、自分なりのプログラムを組もうと。ですから、三年目はレクチャーをやめて、ファベールのアマチュア劇団と組んでやりました。彼等がストーリーを練っている間、こちらは実態調査をしました。

稲邑 どんな調査をなさったのですか。

小貫 今までは大人を対象としていたんだけど、ティーンエイジャーの状況はどうなんだろうと思って。憶測では話ができないですから。13歳から19歳ぐらいまでのティーンエイジャーのエイズの知識や性生活の実態について、インタビューしました。「お宅にティーンエイジャーのお子さんいますか?」と言って、しらみつぶしにファベールの家庭を訪ね歩いて、八百人以上に聞きましたね。予想通りというか、予想以上に、ローティーンからハイリスクグループに入っているのが分かりました。

中村 突然訪ねて、正直に答えてくれました？

小貫 親も本人も、とても協力的でした。ブラジルでは、貧しい人たちほど、お客を大切にしてくれる風土があって、コンタクトのない別のコミュニティでやっても、好意的に回答してくれたんです。それで、ローティーン向けのキャンペーンもできるという実感が持てました。

稲邑 劇は、どんな劇を？

小貫 ストーリーはないんです。僕なんか百回近く見たけど、あきませんでしたね。オムニバス形式で、男の子と女の子の赤ちゃんを、二人の守護天使が「かわいいね」と見守りながら会話するところから始まって、ティーンエイジャーになって恋をすると、守護天使が「そんなことしちゃだめだよ」「いいじゃないか、楽しそうで」とかね。最後はエイズのことが出てきて、「そんなことしてると世界中にエイズが広がるよ」「でも、そんなこと言っていると、この世から愛がなくなってしまう」「何を言ってるんだ」と言い合ったり、いろんなシーンが展開していくんです。

その時は、ティーンエイジャーを対象を絞ったんですが、連日、立ち見が出て。ただ心残りなのは、劇が劇で

終わってしまったんじゃないかというか、エイズに関しては、パンフレットを配っただけだったので、知識がどれだけ残ったかを確認したかったですね。

■知識教育ではなく、心で感じる

小貫 4年目のことなんです。サンパウロで、ある少女がエイズに感染していることを公表したら、小学校から登校を拒否されるという事件があったんです。世論が沸いて、市民やマスコミの批判の中で、小学校は受入れを決めて、行政も、学校での受入れ体制を整えるようにということ、サンパウロ市のたくさんの教師や職員がセミナーを受けるようになりました。93年初頭の段階で、サンパウロの市立の小学生が32人感染していることが確認されたんですが、小学校の年齢まで生きられる子は少ないですし、最近の感染なら、もっと小さい子に出ているわけですから、僕らは危機感を持って、「保育園はどうなっているんだ」という問いかけを、市にしていたんです。コミュニティだけでは限界があって、なかなかたくさんの人にセミナーを受けてもらうことはできませんから。

そうしているうちに、市の職員の中に、耳を傾けて協

力してくれる人が出てきて、ボランティアで、40の保育園でエイズセミナーをしようと計画したんです。

今まで住民を対象にやってきて、僕も保母さん向けのワークシヨップやセミナーは初めてだったから、半年ぐらいミーティングを重ねて案がまとまっていったんですが、そこで皆で確認したのは、州政府がやっているような知的レベルのものではなく、心で感じる事ができるものを作ろうということでした。いきなりエイズの話をするんじゃないくて、一人一人が自分のセクシュアリティを考えることで、エイズを身近に感じてほしいと思ったからです。

稲邑 プログラムの内容を具体的に教えていただけますか。

小貫 一日4時間、全部で5日間のプログラムですが、一日目は、ゲームで自己紹介をしたあとで、一人一人が自分の中に持っている性の問題を考えるきっかけとして、外の芝生の上でバイオダンスをやります。踊りではないんですが、静から動へ、一人から二人、そしてグループでというように、指示に従って体を動かし、他人と触れ合う中で、からだを心を解放していくんです。バイオダ

ンスというのは、体の中にある滞った流れをスムーズにして整えるためのものなんです。日本で言えば「氣」に近いんじゃないかと思います。終わった後、解放感があるというか、みんな気持ちいい、爽快だって言います。

二日目は、自分のセクシュアリティを考えるワークシヨップです。ゲームでウォーミングアップして、活発に意見が出るように、ロールプレイを組み入れて。例えばコンドームをバナナに被せたり、「コンドームを使って」と言えるような状況を作ったりして。それから、ゲームの感想とか、自分が最初に性に目覚めた体験なんかをみんな話合いますが、普段話さないこと、話しくいことを話したというんで、スカッとしたという感想がです。

三日目は、エイズの話をします。ウイルスのこととか、性病の予防のことなんか、知識は知識としてしっかり知ってもらわなくちゃいけませんから。最初はやはり、エイズに対する不安や恐怖があって、聞きたくないもの、嫌なものとして受け止めているんですね。でも、次第に自分の中のいろんな傷、夫や子供との葛藤とかいったものも含めてですけど、そういう自分の問題とエイズが密

接に絡んでいることに気づいていく。ですから、どう受け止めるかは本人次第というか、こちらは知識を与えて、突き放した感じの一日です。受講者にとっては、多分、一番きついプログラムだったんじゃないかな。

それで、四日目は感染者の人の話を直接聞くんです。患者さんがエイズのことを一番よく知っているんですよ。そして、感染者の身になって、いろんなことを感じてもらうんです。

患者さんは弱者です。でも、患者さんが主役になって、政府やボランティア団体と連帯していく、これが世界の潮流です。でも、日本じゃ患者さんはほとんど表に出ない。僕が今一番興味を持っているのは、患者さんたちが連帯していきけるようなネットワークを作るお手伝いなんです……。

五日目は、また皆で話し合いをして、セミナーの内容について振り返ります。これまでのセミナーが、ひとつ成功とっていいんじゃないかと思えるのは、この時にみんな興奮して話が尽きないんですね。それぞれ初めて真正面からエイズを見詰めたという体験、それは予想に反して、とても人生に勇気を与えてくれる体験だったと

いう感想がたくさん出ます。そのような気持ちの上で立つて、それではひとりひとり「自分に何ができるのか」ということを話し合います。

■学校を、開かれた出会いの場に

中村 教室という閉ざされた空間の中で、学ぶこと自体が生徒のストレスになっているような状況で、エイズを自分の問題として受け止めていってほしいという時、あって、切り口を捜すとすれば、そういうことが考えられますか。

小貫 まず、セクシュアリティを扱うことが前提でしょう。セクシュアリティを広くとらえて、生きるとか死ぬとかいったことについて考えるチャンスがあった上での、エイズだと思えます。自分にとっての性を見つけ出していく過程がなければ、自立した人とは言えないだろうし、他人のことを認めることもできないと思うんです。触れ合いとかセクシュアリティとかを掘り出すことから始めて、ようやくエイズの話だってできるようになるんです。

出会うという体験を尊重してほしい。例えば、クラスの様子を取り払って、新たにグループを作ってワークショップ

ップをする、そして、そこで感じたことや考えたことを「誰かに伝えたいと思わないか」「そのためには、どうしたらいい？」という問いかけを、繰り返していくことから始めるとか。生徒自身が、それまでお互いに顔は知っていても、本当は出会っていなかったということに気づくというか、出会いに目覚めるというか、そういうたシヨックが必要でしょうね。

自分のエイズプログラムが変わった一番大きなきっかけは、感染者との出会いでした。出会いに感謝する気持ち、それが一番大きな力になると思うんです。

いろいろなところでエイズのことを話すと、最後は決まって「感染者の人を知らないから、身近に考えられない」と言われるんです。でも、教師自身にぜひ努力していただきたいことは、感染者と出会い、彼等の声に直接耳を傾けるということです。例えば、血友病の人たちの裁判を傍聴することだってできるわけですから。また、そういう出会いができるように、社会を変えていく努力を惜しまないでほしい。学校が開かれた存在として、例えば感染者の話を聞いて、彼らを支えていくということができれば、それが一番ですが。自分が変わる一つのプ

ロセスとしてエイズをとらえてほしいということです。

僕が尊敬していた、ブラジルで感染者として活動をしていた人がいるんですが、今はもう亡くなった彼が「連帯とは何かというところ、お互いを正面から見据えて、一人の中にも存在する違いを受け入れて、違いに感謝するということだ」ということを言っていて、この言葉がとても好きなんです。こういうことが教育の中で生きてこない、エイズはかえって差別を助長してしまうでしょう。違いを受け入れられる、そして、自分の人生を自分で生きようとする人間じゃないと、連帯はできないと思います。

●お知らせ……こんなニュースレターがあります。

感染者と非感染者がお互いに理解を深めることを目的とした、読むとホッとするような、自然体の誌面です。

○お問合せは〒264千葉市若葉郵便局私書箱一一〇号

H・I・V voice 編集局 まで。

○お申込みは、送付先を明記の上購読料一五〇〇円（毎月発行、一年分）を郵便振替 東京91612876

H・I・V voice 編集局 までお申込み下さい。

私も赤ちゃんば産んでみたか

熊本県上益城郡甲佐小学校

岡田みつよ

わあ、トカゲのうんこしよる！

二年生になったばかりの頃、愛さんが、「先生、金魚ば持ってきたよ」とテラス側の棚の方を指さしました。見ると、すでに三匹の金魚が水槽の中で涼しげに泳いでいます。その時、私は、「ああ、どうしよう、死んだときのことを思うといやだなあ」というのが正直な気持ちでした。それから十日ぐらいたって、やっぱり金魚は死んでしまったのです。そこでみんなで、「なぜ死んだのか」を話し合いました。

「えさのくわせすぎだもん」「水のかえすぎたい」「水槽のせまかつじゃなか」など出され、自分たちの世話の仕方に問題があったことに気づいていったのです。

家
庭
科
遊
ゆ
惑
あ
う
く

この事があってから、いろんな生き物を教室へ持ち込みはじめました。ちょうど、理科の授業や作文の授業と重なって、アメンボ、ミズスマシ、カニ、メダカ、トビケラの幼虫、それに、フナ、ドジョウ、ナマズの子やオタマジャクシ、と男の子たちが張り切って捕まえてきます。女の子たちは、よく水槽をのぞき込んでいました。カマキリ、カナブン、カミキリムシ、タイコウチ、そのなかにヤゴもいました。

国語の教科書に『あきあかねの一生』という説明文があります。この中に、「やごは、水から出て、ちかくに生きている草をよじのぼって、さいごのかわをぬぎます」という文章がありますが、ここを勉強している時、「ア

ッ」と、突然純くんが、大声を出したのです。ほかの子どもたちも、その声につられて、「先生」と大声を出しながら何人も立ち上がっていました。「先生、あのビンに草ば入れちゃらんといかん」と今にも外へかけだしそうにしています。すると、大きな声で、「何ん言いよると、もう草は、朝から入れたもん」と恵美さんが言うのと、和子さんも、「もう、私たちが入れとったもん」と、得意げな顔をして笑っているのです。ふたりは、ヤゴが脱皮するための草をすでに用意してあげていたのです。

それから数日後、ヤゴはみごとに脱皮しました。残念ながらトンボが飛び立つところは見られませんでした。子どもたちは、「気持ちよう飛びよつとね」と窓の外を見ながら、心は山の方へむいていました。

その後も、虫たちを次々に教室に連れてきては逃がしてやったり、とうとう死なせてしまったりしていました。そして、トカゲまでつれてきたのです。

二匹います。「ハエば喰うとばい」「ダンゴムシもよかつばい」と言い合っています。育てるためにエサを探さなければなりません。

学級のなかにハエとり名人まで生まれました。純君で

す。純君は、よく、「いや、きつか、しょごつなか」と口ぐせのように言います。その彼が、算数であろうが、国語であろうが授業中に突然立ち上がり、そり、そりとして歩き出します。「純君、何立ちよつとね、席につかんね」と言う私に、人差し指を口の前に立てて、「ハエ、ハエ」言ってハエに近づくとパツとつかまえてしまうのです。そして、それをトカゲに食べさせてあげています。ちょうど五時間目が終わって、帰りの用意をしている時のことです。トカゲを見ていた勇君が、「ヒャー、トカゲのうんこしよるよ」と、びっくりして叫びました。

「エーッ、見せて、見せて」「トカゲのおしりはどこにあつとね」「どきやん、うんこね」と大さわぎ。私もトカゲの肛門なるものをはじめて見せてもらいました。その後も、「先生、トカゲの結婚しよつたよ。だって二ひきで白か液ば出しよつたもん」と、教えてくれたり、「トカゲの耳はここだけん」と見せたりして、トカゲの世話を中心になってやっていたのは和子さんでした。「こぎやん可愛いから、どうして気持ち悪くて言うつとね」と、いやがられる先生もおられるのを見て不思議がっていました。また、授業中、籠から出して、自分のそばに

置いたり、持ったりして勉強をすることもありました。

カメの卵ばうみよる!

六月の下旬、朝、車から降りようとしている私に、子どもたちが、何やら「ワー、ワー」叫ぶので、大変なことでも起きたのかとろうたえていると、「先生、先生、早よう早よう、カメの卵ば産みよる」と教えにきてくれたのです。教室のすぐ前の花だんの中で、カメが一生懸命卵に土をかけているのでした。その先にある池からはいだしてきたのです。

中庭の小さな池に自分で帰れないカメをみんなを押し退けるようにして、水の中に返してあげたのは、和子さんでした。

狭い池なのに親ガメが泳ぎはじめるのを見た子どもたちは、ホッとした様子で、「ワー、さようなら、元気でね」とか、「バイバイ、よかったね」と、カメに手を振っているのです。この日は、子どもたちはもちろん、私も一日中興奮していました。

そして、九月、何と卵を産んでから二ヵ月十日たって、無精卵とばかり思っていた私の予想に反して、子ガメが土の中から出てきたのです。しかも、始業式から二日目、

子どもたちみんながやって来るのを待っていたかのようにゴソゴソと出てきたのです。

子ガメが出て来ることを信じ続けた子どもたちの騒ぎようはすごいものでした。図書室や、家から持ち寄った図鑑をさっそく引っぱり出して、育て方の研究です。食べ物や住みかを確保して世話をしていました。しかし、十日目ごろになって、カメにとつて今の生活はどうだろうか、という意見がでてみんなで話し合った結果、近くの川で一番住みごこちのよい川へ返してやることになり、全員で返しに行きました。その後も、うなぎやハチケンといった魚たちも増え、教室の中はまたにぎやかになりました。他の学級の子どもたちも、めずらしがってよく見にでかけて来ていました。

学級活動の時間、天敵の話をしていると、「先生、清正公山の木ば切つてあるでしょうが、あすこは、公園になつてよ」と教えてくれたので、「へえ、良かったね、ここにはあんまり公園のなかけん遊び場ん出来てよかつたじゃないかね」と答えたところ、「ぼくたちやよね、木のぼりもされんし、木の葉集めも、かくれんぼもされんごつなる」「あぎゃん木ば切つてしまうと、緑の

ものうなりたい」と口ぐちに訴えてきたのです。和子さんは、「私げんお母さんは、庭の草ばとろごつなかけんてコンクリートにしょいて言わす。だけん、私は、虫もおらんごつなたい、て言うた」と、家での出来事をみんなの前に出していきました。多くの生き物とのかかわりのなかで、生きるためには、食べ物や、生活環境がどのようにかかわっているのかを感じはじめたようでした。

その後、自分たちの学校の図書館には、生き物に関する図鑑などが少ないこと、高学年用のものが多いことに気づき、自分たちでも読んだり、調べたりすることができ本がほしいと、図書の購入要求もしていきました。

ぜんぶ、人間のものにしてしまつとる

森林伐採のことや、虫が追い出されて行くことに、何かおかしさを感じてきている子どもたちと、写真集『奇形ザルは訴える』を使って、〈食べ物による健康障害〉の学習をしました。写真を見ながらではありませんが、和子さんは感想の中で、「人間がつくったもので、病気の赤ちゃんザルが生まれてくるのをはじめて学びました。それに、サルがすむところを人げんが、木を切ったり、土地にしたりして、サルのすむところをぜんぶ人げんの

ものにしてしまつて、しなせたりしているのがわかりました」と書いてきました。授業中も「わあ、こわか、何でそぎゃんくすりばつかうと」と人間の行為に怒りをあらわしていました。一学期に、〈白砂糖の害〉をすでに学習し、炭酸飲料の中の砂糖の量やそのからくりに驚いたことと重ねて考えているのです。また、「人間も害がくるかもしれんけん、生まれる子どもがからだがちがうかもしれんけん」と、言う声があったので、胎児性水保病のことを取り上げました。

わたしも、はよ赤ちゃんばうんでみたか

森林の緑が、自分たちの生命と関係があることに気づいたり、奇形ザルの学習で食べ物にさらに関心をむけた子どもたちが、「先生、酸素ばすうたら、どこさんいくとね」とか、「食べ物はからだの中でどぎゃんなつ」といったことをよく尋ねてくるようになりました。そのつど、答えてはいたのですが、子どもたちは満足しませんでした。そこで、『おなら』、『ちのはなし』、『ほね』などの絵本を使って、からだのしくみやはたらきは、どうなっているのかを子どもたちと学習しました。『ほね』の勉強をしている時、「先生、そこところは、こ

う丸ね」という言葉がでてきました。日頃、子どもたちに、性器もからだの一器官であることをしっかりとらえさせたいと思っていたことや、お母さんが、和子さんから、「赤ちゃんは、どうやってうまるっ」と尋ねられ、一生懸命説明されたが、結局、「こわか、女にうまれんならよかった。赤ちゃんうむとはこわか」と思わせってしまったのを気にしておられたこと、将来にわたって自分の生命を尊び、たくましく生きぬいてほしい、と強く願っておられるお父さんやお母さんの思いなどを受けとめて、〈わたしのからだ―性器―〉〈わたしはどのようにできたの〉の学習に取組みました。

〈わたしのからだ―性器―〉では、性器の仕組みやはたらきを知ることによって、自分自身のからだのすばらしさに気づかせ、さらに関心を深めさせたいというねらいで授業をしました。

男の子と女の子の等身大の図で、外性器の位置や大きさを確認しました。ペニスとクリトリス、陰囊と大陰唇が対応していることなどを知って、「へえ、女にもペニスのあつとね」「バアー、何でんいっしょたい」と、とてもにぎやかです。そして、内性器も男の子と女の子を

比べていく中で、子宮とワギナだけが男の子にないことに気づいていきました。子どもたちの感想には、「ふしぎなことは、おとこのことおんなのはあまりちがわない」とか「男と女はすこしちがうところはあっても、だいぶんにているんだなあ」「男も女もおなじだったなんてしらなかった」といったものも多くありました。

次に、内性器のはたらきも、図を使ったりして、精子と卵子を比べていきました。数のちがいに驚き、男の子が、「ほら、おったちゃこぎゃんおおかっだけん」と言えば、女の子も、「何ばいいよつと、大きさはくらべてごらん、わたしたちの方が大きかとよ」と教室の中は、それはそれはにぎやかです。「あんたたち女の子のからだはね生まれたときにはもう、赤ちゃんのもがまだ大きくはなっていないけどあるとよ」と言う、「ええー、もうはいつととね」と驚きとともに感激していました。〈わたしはどうしてできたの〉ここでは、ペニスからでた精子はどこへ行くのか。というところから始めました。「先生、精子がでるとき、おしつこと一緒にやでらんとね」と心配そうに聞いたので、「ああ、そうね、心配ね、でもだいじょうぶよ、精子がでるときにはちゃんと、お

しつこのでるぼうこうの出口は、ちぢんでしまるようになつとるけんね」といえば、「ワアーすげえ」とか、「カッコよか」といった声があちらこちらからでした。「その精子はどぎゃんなんと」言うので、ペニスもワギナの中にきちんと入れて射精することを教えました。すると、「ワー、入れるとね」「どうやって入れると」と子どもたち、「あんね、針の穴に糸は通すとき、糸がふにゃふにゃしとったら入らんでしよう、だから、ピーンとなるように、つばばつけちねじったりするでしょう」と話すと「うんうん」とうなずいている。

「その糸んごてね、ペニスもピーンと立つ時があるでしょう、どぎゃん時こんなになるね」と男の子に、図を見せながら尋ねると、「あっ、プールに入ったとき」「ずっとさわった時」「あんね、おしっこしたか時もあるよ」と口ぐちに言っていました。そのうち、「先生、おしっこしょごつなってきた」といって、男の子のほとんどが、トイレに走っていったのです。私も、女の子も驚いたと同時に、笑ってしまいました。

そしてまた、授業再開、「ピーンとかたくなつて立つから、それをワギナにいれるんだよ」と言ったら、正君

が、「ワー、いたかごたる」と言ったので、「うんうん、痛くなかとよ。ちょっと、ほつべたに手ば当ててごらん」と言うのと、「わあー、つめたかけん気持ちよか」と返ってきました。「ほら、そぎゃんごつ気持ちよか」とよ。それにね、入りやすかごて、ぬるぬるした、液んごたつともワギナのところにでてくるけん痛くなかと」と話してやったら、「ふうん」とうなずいていました。

精子と卵子が出会うまでのことを知り、「だけん、精子にはしつぽがついととね」とか「何でいっばい死んでしまうと、かわいそか」とか「もったいなか」といった声が男の子たちからでした。

また、数百個の精子が卵子の膜をとかしはじめ、やわらかくとけたところにいた精子が、一匹だけ入ったら卵子の膜はかたくなり他の精子が入れなくしてしまうことを知った子どもたちは、「ワーすごいね、自動ドアんごたるね」とそのメカニズムに驚き、感激していました。

次に、「どうやって大きくなっていくのだろう」と言う問いで考えさせました。へその緒を介して栄養をとっていることは多くの子が知っていました。「じゃあ、へその緒を流れている血液は誰のものだろう」という問

いに、赤ちゃんの血液であると考えた子は一人もいませんでした。そこで、一人ひとりに米つぶを配って、「あんたたちはね、こぎゃん小さか時から自分の心臓は動かして、お母さんの胎盤から、栄養や酸素を受けとって自分のからだに運んでいるんだよ」と話してあげました。子どもたちは、米つぶを一生懸命手にとって見ながら大騒ぎです。幸子さんが、「心臓のこぎゃんこまかつたつね」と言うと、隣の剛君が、「何言うと、そん米つぶの中に心臓があつとだけん、まだこまかつよ」と言えば、「ひゃあ」と大声を出しています。その後、「おしっこやうんこはどうしているんだろうか」といったこともみんな出し合いながら、お母さんのお腹の中にこれ以上いられないという合図を送り、自分から一生懸命生まれてきたこと、お母さんも一生懸命助けてくれたことなどを学習しました。

この学習で、和子さんを中心に、そのまわりの子どもたちにも、おかあさんの体内で、自分自身（胎児）が精いっぱい生きていく独立した生命体であったことを分かってもらうことで、生きることの意味を考えさせたいと願ったのです。「赤ちゃんうむとはこわか」と言っていた和

子さんは、「いや、すごかたい、先生、私もはよ赤ちゃんばうんでみたか」と変わっていきましました。

お母さんも一時間は授業参観され、「こぎゃん勉強は、私たちはしてないけん、何も知らんだった、やっぱ子どもと一緒に勉強していかなんですな。そして、ぜひ、お父さんにもこぎゃん話ば聞かせて、勉強してもらいたかです」と語ってくださいました。

おわりに

虫やカメたちとの出会いの中から、食べ物や生活環境に目をむけ、自分のからだや生命のすばらしさを感じ取っていった和子さんやまわりの子どもたちです。トカゲを気持ち悪いとってみようとしなかった私。森林伐採といえ、東南アジアなどのことと考えてしまう私に、子どもたちは、自分たちの生活や遊びを通して多くのことを教えてくれました。こんな和子さんや子どもたちのかかわりをしていかなければならないと思っています。

性の理解から愛の理解へ

熊本大学非常勤講師・元中学校教員

田中裕一

家
庭
科
遊
ゆ
う
惑
あ
く

I 「性」をどう捉えるか

1 性教育の困難性

「性」そのものの捉え難い正体を、自分の性の内奥をくぐらせて考える事の難しさを自覚するならば、自分の苦しみを伴わぬ「アツケラカンの性教育」など、嘘っぽくて、私にはできそうもない。性を捉える事は難しい。

マルクスも、その処置を誤った隠し子ゆえに非難される。チェーホフも、日本人売春婦との情事が露顕し、アインシュタインでさえ、夫人への態度は必ずしも紳士的でなかった。

ボードレエルは二人の女性を「青いバラと黒いチュリップ」と歌い、精神と肉体を使い分けたし、D・H・

ロレンスも精神と肉体の分裂には悩んだはずだ。

「罪なきものまず石にてこの女を打て」(ヨハネ伝第八章)の場面が感動的なのは、自分の主体を通して問うからであろう。ルネサンス期のエラスムスはこう言う。

「人間の間でとにかく行われている事は、何だかって愚かしさに充ちていないでしょうか」(「愚神礼賛」)

性の問題の困難性は次の点にある。

(1) 性そのものの密室性——商業主義と性教育によってその秘儀性を失いつゝあるとは言え、人間は本来、人前で性行為を晒さない。

(2) 共生の困難性——性の関係は偶然の対一の結合であり、対人類の連帯ではない。だから結婚制度さえ、

第三者の介入で崩れることもあるという、独占性・排他性を持っている。総務庁の調査では70年から90年まで、

日本の非婚率は47%から64%（男）、18%から40%（女）に伸びている。中高年離婚、夫の墓に入らない冥界離婚の増加も、個人の結合がいかに困難かの証明ともなる。

(3) 種の為行動しない動物の困難性——近年の動物行動学の成果で、動物が個体——DNAの適応進化やその集団の条件で行動が決定されるという「個体保存」の仮説が有力になり、かつて見られたような性善説に立った『種族保存』の原則の、安易な人間への適用に疑問が出されるようになった。生態学の研究により、動物と人間との間の境界が限りなく消滅しつつある今、一個の個体としての子どもの権利が保障されるためにはすべての子どもたちの権利をという子どもの権利条約を、人間が持つことの重要性がより鮮明になってきた。

(4) 非公開の性の公開——性行動は、非公開というプライベートな性格を持ちつつ、教育としては公開性を持たねばならない。

ここで必要なのは、断片的知識の寄せ集めである性機能・避妊・エイズの三点セット性教育のノウハウではな

い。男女の結合を基盤として、生活、家庭、経済、出産、育児にわたり、中でも男女や世代間の平等、子どもの最善の利益の保障という人権意識に立った性教育の流れが必要である。

2 性教育の可能性

人が寿命を縮める一番の衝撃は、その親の死でも子ども死でもなく、愛する異性の死である。また一人の末期ガン患者の生きる力を支えるもの、それは医師以上に愛する人の献身である。

破天荒な35年の生涯を閉じたモジリアーニの死を看取ったジャンヌ・エビュテルヌは、その翌日、アパートから身を投げて死んだ。

結婚許可の訴訟に勝訴して、やっと結ばれたロベルト・シューマンとクララは、理想的カップルとしてお互いに支え合って活躍した。ロベルトが精神病院で46歳で没した後、クララと七人の遺児を支えたブラームスは、深くクララを愛しながら終生独身を通した。独語の「Sie (あなた)」から「Du (君)」に「尊敬する奥様」から「愛する友」そして「愛するクララ」と推移するブラームスの書簡は美しい。クララが遺児たちに語るよう

に、二人の交情の深さと美しさと抑制と創造への輝きは終生変わらない。

ブラームスは、クララの死に衝撃を受け、やっと間にあったその埋葬に立ち合った以後の消沈はひどく、翌年、肝臓ガンで没したのである。

こうした様々な人々の愛と生き方を、その多様性において学ばせてはどうか。もちろんその明も暗もである。

十二月十六日（ベートーベン誕生日）には、作曲家と作品と女性たちの話もできる。そこから、ベートーヴェンと彼が月光ソナタを捧げたグチャルデイの話にも、映画「月光の夏」の話にも入ることができる。

歴史で「ダビデ像」を見せる。男子の何人かがニヤつき、女子の何人かがうつ向く。この機会を逃がしては「ルネサンス」の理解が台無しになる。なぜ、青年の巨大な全身裸像を青年ミケランジェロが必要としたのか、そこにこそルネサンスの人間賛歌と栄光がある事を知り、全員が真剣に作品を凝視できるようにする。

そして、そのような「学び」の営みの中にこそ性教育は自然に織り込まれていくのであろう。

II 愛と性をどう捉えるか

以下、私のささやかな試みを示そう。

1 愛のコンサート（ソナタ形式による）

まず、子供たちに「好きな人」「性的被害」「動物の交尾」「性への質問」で無記名男女別のアンケートを作り、委員班長会議で整理、プリント資料として他資料と共に配布。

私は、この授業「愛のコンサート」を、四時間のソナタ形式で立案した。（数校で行った研究授業では、中学三年にこれをコンパクトに60分でまとめ、音楽室で授業した）

第一楽章 ペアリング・ヒストリー（性の歴史）

第二楽章 セックス・メカニズム（性の構造）

第三楽章 モダン・セックス（性のゆがみと解放・権利としての性）

第四楽章 ラブ・コンサート（愛の中の性、生活と文化の中の性）

の流れで、各時間に第一・第二の主題を設定し、提示部、展開部、再現部として授業した。

（序奏）人は生まれ、生き、生み、死ぬ。それは一回切

りで、やり直せないが、これからをどうするか。愛の意味は広く深く、人間に生きる力を与えるものなのだという事を示す。

〔提示部〕二つの主題が示される。

第一主題は「生物としての人間」——〈自分が大切〉という生物の個体維持の原則から、雄にとって雌、雌にとって雄が大切であり、自分のコピーを残そうとすることへ。〈私が大切〉から〈配偶者が大切〉〈子どもが大切〉となる。

植物では、雄しべと雌しべの成熟の時期をずらし、枯れた雄しべの位置が雌しべから離れた後、雌しべの柱頭を開いて、近親婚を避けるキキョウ、親の遺体上に繁茂するエゾマツの倒木更新の感動に触れる。動物では、カマキリの交尾、サケの産卵、子どもに我が身を食わせて死ぬカバキコマチグモの保育などの写真を見せて説明したが、大変興味を示す。

第二主題「人間の愛のかたち」——他の動物とどこが違うかが示される。奈良での記念撮影で、鹿が交尾を始めた時の、高校生の表情を示す。当惑、羞恥、笑い、凝視、軽蔑……。人間が人前で鹿の様な行動をとらない戸

惑いから、人間の生活や文化の力に気付く。

また、新しいボスが自分のコピーを残すために、保育中には発情しない雌ザルの連れ子(他の雄の)を殺して発情を促すハヌマンラングールや、同じ群れの中の子(雄)を殺すチンパンジーの子殺しに対比させて、人間は子どもの権利条約を持つことにも触れておく。

〔展開部〕性の理解から愛の理解へ進む。第一主題「動物としての人間」から第二主題「人間としての人間」へ授業を進める。

1 〈before bed〉

ペアリング・アプローチ 「好き」、それからどうなると、生徒の日常の心理を追う。

◎ 出会い(「おや」と思う。はっとする)

◎ 関心(「いいな」「知りたい」と気になる)

◎ 意識化(きょうも会わないか、どきどきする。夢に見る。名前を知る)

◎ 表現化(気持ち伝えたい、知りたい、手紙、ノート、電話)

◎ 接近欲(話したい、そばにいたい、デートしたい)

◎ 接触欲(イ)所持品(ボタン、鉛筆等)

(ロ) 身体表部—(手、腕、肩、髪、触れた手を洗わないでおく)

(ハ) 身体秘部—(唇、胸、性器)

◎性交欲 (相手が欲しい、性交、受精)

これらは自分がどの段階にいるかが見えてくるので、生徒の最も身を乗り出し、得心する所である。生徒の9割に好きな人がいるのだから。

2 (in bed)

ここで妊娠→避妊のメカニズムとその問題点を、医学的に説明する。(プリント配布)

(イ) 排精→コンドーム・ペッサリー

(ロ) 排卵→ピル

(ハ) 受精→精管・卵管結紮けっさう

(ニ) 着床→IUD (避妊リング)

問題点として(イ)は有効期間、取扱ひ法のトラブル、

(ロ)はエストロゲンの発ガン性や心筋硬塞誘発性、

(ハ)は子どもが欲しくなった時に、もとにもどすことが困難、(ニ)は出産未経験者に不向き、を挙げる。

なお、妊娠→人工妊娠中絶では、中絶可能期間、裂傷、腹膜炎併発、胎児の尊厳、母体への危険・精神的苦痛ま

で、女性の一方的負担となる現実は、重要事項である。

これらを両性で学び、子どもの権利にも触れる。エイズ、梅毒などの性感染症の静かな広がりにも考慮を払う。

3 (after bed)

ここで妊娠から出産への不安と期待、家族の祝福の中で生まれる赤ちゃんの幸福と、周囲の冷たい目の中に、期待されざる妊娠と出産に苦しむ母子の不幸と差別に触れる。そして性行動が、決して二人だけでなく、その結果としての子どもへの男女共同の責任を伴うことを、考えさせる。愛の結晶としての子どもを、健全に心豊かに育てる社会的・文化的な力を、今、自分が身につけつつあるかどうかを気づかせることになる。また生まれる赤ちゃんに備わる素晴らしい能力にも触れる。

胎児は母親の胎内ですでに外界の音を聞いているので、赤ちゃんが泣き止まぬ時、母親の心臓の鼓動のテープを聞かせると安心して鎮静する。乳首吸引の体内練習は有名である。また生まれる時、狭い産道を通る時は母親も苦しみ、赤ちゃんも苦しむ。このストレスが、副腎アドレナリンの分泌を高め、外界に出たときに一挙に酸素を補おうと産声を挙げる。それで流入した酸素によって、

外界での肺呼吸が始まる。親子で生まれ出づる苦しみを共有し、新しい生命を支えることが、無痛分娩やラマーズ法以前の原則なのである。

赤ちゃんが目を開いた時、そこに母親の笑顔があり、家族の祝福がある。ローレンツの「刷り込み」を待つまでもなく、それが最初の親の認知である。親が心豊かな状態にあれば、微笑み交わす笑顔や、「わが、肉の肉、わが骨の骨（聖書）」といった愛と信頼の瞳や話しかけは、重大な幼児体験を形成する。絶望にうちひしがれた母親にミルクを飲みやめて近づき、肩に手を掛けて励まそうとした赤ちゃんの記録もあるほど赤ちゃんは理解している。

2 第二主題としての人間の愛の形に入る

生物としての性のエネルギーを持ちながら、それを動物段階で終わらせるか、人間として理想を貫き、家族や社会や文化を創造するかは、自分自身の判断と意志にかかっている。

ここで、終結部カデンツァとして、様々の、愛に生きた人々に生まれた作品に触れてみる。性のエネルギーがかくも見事な昇華、結晶を見せた作品を紹介する。楽器

を弾ける生徒がいたらしい。いない時は私が弾く。

ベートーヴェンがジュリエッタに捧げた月光ソナタ、ショパンが初恋のコンスタンチアを思いつつ作曲したワルツ（第十三番）、フィアンセのマリアに捧げたワルツ（第九番）、その婚約が破れた時、彼女の手紙をひと包みにし、「わが哀しみ」と書いた頃作曲したピアノソナタ（何れの曲も、時間により一部または全部）。異性間のエネルギーを、かくも美しく文化に結晶させる進化の遺伝子を、他の動物は持たない。

（再現部）（1）人間は自然の中の生物である。（2）人間は、自然の性の力を、努力し、働き、協力すること、愛の生活と文化に変える力を持つ。この二つのテーマを再現し、確認した上で、障害を持つ詩人、星野富弘氏が夫人を歌った詩のプリントを朗読して授業を終了した。

編集室より

*10月号の「MENS 家庭科―男たちのセンタク」の執筆者は寺田智司さんでした。訂正し、お詫び致します。

男女共修で「性」の授業を

大阪府立島上高等学校

林 咲子

■いざ、共修で「性」の授業を

私の勤務する大阪府立高校での家庭科男女共修は、昨年、二年生のみ2単位という形でスタートした。教職歴三年目にして抱える「大仕事」という緊張はあるものの、特別にテーマを捻り出したわけでもなく、共修だからこそ、というものも見つからず、「始まってしまった」四月であった。

私は着任した年、一人の「妊娠した」という生徒と関わった。しばらくして彼女は出産を決意し、自主退学の後に結婚、男児を産んだ。翌年、また新たに二人の生徒が卒業を間近に妊娠。一人は、私が保護者・彼・本人の間に立って相談した結果、経済的理由で中絶（ただし、

二人の交際は現在も続いている）。もう一人は、婚姻届を出した後、少し目立ったお腹で卒業し、出産した。

——と、何かの報告集のような話に三度もぶつかったのだ。

そういう私の経験から、まず保育分野から取り組むことにし（食物分野を二学期にして）、「男女の体のしくみ・妊娠・避妊・性病」という情報を詳しく与えることから授業は始まった。「咲ちゃん（と呼ばれている）、ようそんなこと堂々と言うなあ、プリントも過激すぎるで」「恥ずかしいんかあ？」という声飛びもの、生徒の反応はよく、自分では結構満足だった。しかし、「何か保健の授業みたいやなあ」という生徒の声にハッ

家
庭
科
遊
ゆ
惑
あ
く

と我に返り、「ほんまや、家庭科の授業として何するつもりやったんやろう」と悩むことになる。というものの、急によい案も浮かばず、ただ用意したものを進めることになってしまった。

性交渉については、どのように話をしようかと思っていた時、「廊下でいちゃつくやつら、めちゃんカつくなあ」という生徒のボヤキを耳にした。そこで、「高校生の男女が仲良くするということはこういうことか」を授業で問うてみた。「話をする・遊ぶ」から始まって「つきあう」へ。「そしたら、つきあうって何や」という問いには「特別にスキという気持ち加わる」「互いを高め合う」の中に、「エッチする」を発見。やはり出たな、と感じた。

用意しておいたプリント（ある女子高生からの「彼との交際に肉體関係が必要か」という悩み相談）を配布し、あなたたちは、①異性とスキンシップしたいか？ ②高校生のセックスをどう思うか、③なぜ、世間ではそれ及早すぎると言っていると思うか、④プリントの相談に対してどうアドバイスするか、を尋ねてみた。口頭での発表はしづらいだらうと判断し、5、6人のグループ討論

（同性同士）の結果を記入させ、私が読み上げる形をとった。

多数をしめた意見は、①ある。寄り添いたい。手をつなぎたい。安心感につながる。②個人の自由だ。やりたいやつはやればいい。③妊娠が怖いから。経済的な問題や、世間体から中絶するケースが多いから。④男は性欲を止められないと思うが、女は男に嫌われまいと受け入れるのではないか。しかし、自分が嫌なら断ればよい、——などであった。

中絶に関しては、別に時間を取り、「世の中には、中絶せざるを得ない状況がある」と理解を訴え（大半の生徒がこの観点からのアプローチは初めてだったらしく、諸外国の様子に興味を示した）、同時に中絶手術の危険性も説明した。この場合、私個人の見解を述べることはあえて避けた。しかし④に関しては、「セックスしたくないと言える・それを聞き入れる関係でなければ、互いを理解しているとはいえないのではないか。性欲を理由にセックスを強要するな、されるな」という私見を述べた。

性欲については、男女共にあるもので、理性によって

コントロールできるとも説明した。その頃、新聞で従軍慰安婦問題が大きく扱われ始めた時だったので、その切抜きや、本からの抜粋をプリントにして「これこそ〃男のほう性欲が強く、コントロールできない〃という考え方から起こった事件ではないか」と問いかけたところ、「ひどい。男のエゴだ。女をどう扱ってもいいのか」という率直な感想は寄せられたものの、逆に彼らのレベルとは別次元のものという印象が深くなり（彼らにとってはこの授業の出発点からはズレてしまう結果となった。頭に分らせることができて、実感させることができなかったと悔やんだ授業であった）。

■出産シーンを見て

次に出産についての授業を行った。

まずラマーズ法による自然分娩をビデオで見せた。見ている途中、ニタニタ笑う生徒が多いのに気づき、聞き耳を立てると、異様に大きな妊婦の乳房や黒ずんだ乳首が話題となっていた。妊婦に起こる自然現象だよと説明したが、雑誌や友人からの情報が大半を占める彼らは、「ええ？ そうなん？（セックスの）やりすぎちゃうん

？」と本気で思っている様子。

次の妊婦が分娩台に仰向けで足を広げて寝る姿のシーンでは「恥ずかしくないよ」の女子の声が上がったので、「出産方法やスタイルは、調べればもっとある」と一言はさんだ。すると、ある男子が、「うちの婆ちゃんは座って産んだって言うてたでえ」と発言。そこで、以前私が読んだ本の内容を思い出しながら、出産方法についてさらに具体的に話してみた。すると「あの格好で頑張るのはしんどいやろな。力が入らへんで、絶対。おれらが便所で出すよりもっと大きいもん出すねんもんなあ」と爆笑を呼びながらも、男子生徒からの反応が返ってきた。

出産は女だけの問題ではなく、夫婦二人の共同で成り立つものだ、と訴えたかったので、〃夫が立ち会おう、夫婦の感動が伝わるビデオ〃と見て見せたのだが、先の反応や、「僕の子供が生まれる時は奥さんを助けてあげよう」「将来、私も出産するときは精神的に支えてもらいたい」などと言った彼らの発言から、少なくともこの時点では、男子女子共に「女だけで出産を乗り越えるのはナンセンス」と思っているように感じられた。

しめしめ、という気で再びビデオをスタート。いよいよ赤ちゃんが生まれるというシーンでは、広がる膣口、赤ちゃんの頭の大きさ、へその緒の太さ、羊水や出血の量などに驚き、全員が、ワーだのオーだのわめき出した。感動のあまり泣き出す生徒もたくさんいて興奮状態が続いたが、ここで授業の雲行きは少し怪しくなった。

「出産はめちゃくちゃ怖い。自分は産みたくない」「なんで女だけあんなに痛い思いをせなあかんねん。手術で男も産めるようにできへんの？」という女子。「男に生まれて良かった。あんな気色悪いのはいやや」「男は痛くないからいい」という男子がかなりいることが判明したのだ。「女には、男に味わえぬ産みの喜びがあるじゃないか」などと話してみたが、どうにもピンと来なかったようで、あえなく時間切れとなってしまった。

■女と男はどちらが得か

すぐ次の時間は、とりあえず話を延長させてみたが、「男と女はどちらが得か？」のような展開となり、生徒はそれぞれが自分の価値観で「どっちがいいか」を主張しはじめた。雰囲気がまずくなかったので、「確かに男と

女には体のしくみの上で代われない立場がある。しかし『親』となることには何の違いもない」とやや意識的に矛先を変えてみた。するとすかさず「けどなあ、子育ても女に任せる男の方が多いでえ」「やっぱり女のほうが損ちゃうかあ？」と切り返された。

そこで、「男女は平等であることは分かるよね？」ところが、例えば給料などは、いままで女であることだけを理由に差をつけられてきたんだよ。だから、法律で、〃平等〃ということが表されたんだ。私としては、そんなあたりまえのことを法律でわざわざ言わなきゃならないなんて、という気もするけど。君達の感覚は〃あたりまえ〃をキャッチして生活している？ 今、君達は子育てでは、女にかかる負担が大きいと思っっているかもしれない。なぜ女が、と思うのだろう。男も、女も、とは思えないの？」と言って反応を待った。その後、「しかし、女だけに起こる妊娠・出産という現象については負担がかかると言えないことはない。だから〃特別な状態〃として法律で守られているんだよ」と付け加え、いわゆる〃母性保護に関する法規〃を説明した。

生徒は具体的な事象や人については、興味津々という

態度を示す。そこで、私が例となって産休・育休・生理休暇・母子手帳……と話を拡大していった。

ところが労基法の話（女子の深夜労働・危険業務禁止の項）については、「咲ちゃん、それってなんで女は許されてんの？」「男と女は体がちゃうやろ？ しゃあないけど、女だけ軽減されんのはずるいよなあ。おれらはどんな仕事もせなあかんねんで。かわいそうや」という意見が出てきた。

彼ら男子にとっては、これまで取り上げてきた題材のどこかに、責められるものを感じてきたらしい。「今まで弱い立場だった女の地位を高めよう↓女だけが保護を受けている。今まで女は不当な扱いを受けてきた↓男は悪者だった」こんな思いがしたのだと思う。振り返れば、確かに女からの視点が多かったような気がする。男女の何が同じで何が違うのか、それをどのアングルから捉えるか、私自身の混乱が生徒の混乱を招いてしまった。

■筋書きどおりにいかない

御覧になってお分かりのように、授業内容・進め方はお恥ずかしいものである。だから、もし私に言えること

があるとするれば、女子のみの授業との比較（と言っても少ない経験しかない）であろうか。

生徒の授業に対する反応は実に単純で、興味がない時は眠り、関心事は、聞き耳を立てる。それは見事なものである。つまらない授業の時、女子の場合「お愛想で聞く」「頑張って起きている」感じが伝わるものだった。ところが、男子が入ると「面白くないぞ」という空気がすぐ教室内に充満する。また、女子は感想を用紙にのみぶつけるため、私とその授業の反応を知るのは一日遅れとなる。男子が加わると、疑問や文句は、即、言葉で現されるようになった。これは、私にとって、「準備時間を与えられぬまま返答を余儀無くされる事態」が生み出され、苦しいものであった。

今年もまた、この分野の授業が始まる。授業に行く前は「ああ話してから、こう終わる」という展開を考えていくのだが、筋書き通りにいったためしはない。自分の考えていた結論自体が揺らぎ出すことも多い。昨年のように男女の損得争いをさせたり、男を責めるような展開にならないように気をつけたいと思っはいる。テーマ選びをどうしよう、など、頭の痛い今日この頃である。

少女たちのセルフイメージを 解き放つ

東海大学第三高等学校
竹内未希代

「A↓Bはわかるけど、Cはピンとこない。なんで性器と性器の結合で愛が深まるの？ 納得いかないのに、彼との間がどんどん進んじやって、なんかイヤ」

「今日はいしなくておこうって言ったなら、別れ話にまでなっちゃって。別れたくないから、仕方なく……」

自分の体の声より男の要求を優先させる少女。男女の接触欲の差は段違いなのに、性交の結果を負うのは女の体だけなのに、配慮なしに性交を求める少年。「愛」の名のもとに。少年少女だけではない。大人の男と女違って、性を愛を仲立ちとする最も個人的なコミュニケーションの場で、同意なき性交や、その結果としての望まない妊娠等、女に犠牲を強いる現実を温存しつつづけている。

「自分を大切にするんだよ」

あれこれ言ってみても、結局の所、少女達にこんな言葉しかかけられない自分を、もどかしく思ってきた。校内事情から、音楽専門の私に、家庭一般二単位（一年女子のみ、家庭経営・母性父性と保育）が転がりこんできた。

相手と時間と場が与えられた私は、こう決意した。「少女が本当の意味で自分を大切にできるよう援助するんだ！」

こう考えた背景には、女子の性受容度の低さがあった。勤務校の自立度調査では、今の性に生まれて良かったと言いきれない者が、男子では20%、女子では60%を越え

家
庭
科
遊
戯
感
あ
く

ている。「女なんか生まれちゃって」。女であることを安く見積ることは、自分の値打ちを安く見積ることになる。当然、自分を大切にできないだろう。とりわけ、性が土俵となる男と女の綱の引きあいでは、この力学が働く。

《自分のからだのことは自分で決める》

担当する二つの領域の共通テーマを「自分らしく生きる」とし、「自分らしい生き方を実現させるには、どんな力が必要か」を意識させるようにしてきた。母性の授業では、生と性と生殖をトータルに自己実現する力、性の自己決定能力をつけたいと考えて、少女達にはこう表現した。「自分のからだのことは自分で決める」。

性受容度の低い理由を聞いてみた。大人の友達と同じ項目が揃ったが、特徴的なことは、第一位に月経がくる事である。少女の現在を生きにくくしているのは、社会的制約ではなく、体の女性性である。月経から取り組もう。

「女には毎月あるあたりまえの月経をなぜ隠すのか？」意見は二つにまとまった。

(1) 出るのが血だから

(2) 出るところが性器だから

(1) を受けて、科学的理解と、人間が血に強く心を動かされる反応、「血への畏れ」の歴史を、土偶、古事記等を資料として調べてゆくことで、少女達の月経観に揺さぶりをかけた(「新しい家庭科We」91年6月号掲載)。私自身、教材化を通して月経観が変わり、女として生きることが楽になった。少女達からも強い手応えが帰ってきた。

受身的に与えられた性と体を、自我に目覚めた今、主体的に選り直してほしい。男性との比較ではなく、損得を超えた受容にたどりついてほしい。「自分らしさ」とは、ヘアスタイルや趣味のことではない。性と体なのだ。

《性器で何を教えるか》

もう一つの「性器」の授業も、月経と同じ方法を進めた。内性器は月経学習で既習である。外性器の知識やイメージを簡単に調査した。

「呼び名はあそこ、話題にしたことはなく、指で触るのに抵抗があり、鏡で見た事もない。形、名称、機能はほとんど知らない」、これが多数派である。学ぶ機会もないから、ごく当たり前の事で悩んでいる。イメージは、

「大切だったことは判ってるが、エッチ、スケベ、いやらしい、恥ずかしい所」が主流。ごく少数が、「宝物、気持ちいい所」。記述から気になるものを挙げてみよう。

①男子と違って、明るいイメージは全くない。

②処女を取っておくとか、男の人のための場所。

③触れてはいけない所って思いこんでる感じがする。もし自分が見たり触れたりしたら、誰かに見られていような気がしてしまうだろう。

②の「男の人のための場所」にハツとした。月経学習の時、「内性器は子どものための場所」と書いた子がいたのだ。少女というのは、快樂装置と子産み装置の宿主として使用されるのを無自覚に待つ存在なのか。

《内性器で伝えたいこと》

まず性の分化からだ。男女は同一の原基から分かれた存在で、その原型は女型だ。男はXY、女はXX。受精を式にして共通因子をくくり出す。

$$XX + XY \parallel X (X + Y)$$

女印Xが共通因子なんだよと言うと、なるほど！ という表情。この式はインチキだがわかりやすい。処女生殖でも生まれるカエルやウサギとクローン人間の例から、

生命継承リレーの主流は卵子にあること、卵子もX染色体も大ききで勝っていること、Xを二つ持つ故の生命力の強さ等を説明する。だからといって女の方がエライと言いたいんじゃない。「女なんか」と思っている少女達のセルフイメージを、パワーアップさせたいのだ。

次は内性器の出すメッセージについて。女には、複数のホルモンが作り出す一ヶ月サイクルのリズムがあり、たくさんのメッセージが発信されている。月経や基礎体温だけではない。乳房や乳首の感受性、子宮の高さ、子宮口の柔らかさ、おりものの量と質、人によっては肌の具合、顔のむくみ、性欲の強弱、気分の変化等々。これらは、定期的に送信されてくる、健康状態を知らせるお便りだ。子宮口の高さと、子宮頸管粘液の量やねばり具合でも、排卵を知ることができ、妊娠や避妊にも役立てられる。すべて自分のための自分情報なのだ。

右手でエストロゲン、左手でプロゲステロンの波をゆっくり描きながら、体内時計の話をする。満月に一斉に産卵するサンゴ、やはり満月の夜、交尾産卵のため、満ち潮にのって決まった一つの島に集まるカニやカメ、これらを例にあげて、生命と宇宙の不思議な連動が、女に、

とりわけ女の内性器に及んでいることを語る。できるだけドラマチックに。できるだけ美しく。(資料1)

少女達はこういった話が大好きだ。満月や満ち潮のイメージに、月経やおりもののイメージを重ねてほしい。

「自分のからだのことは、自分で決める」ための手がかりは、ていねいにつきあえば内性器が教えてくれるんだよ、記録を取ってゆくといいね」とまとめた。

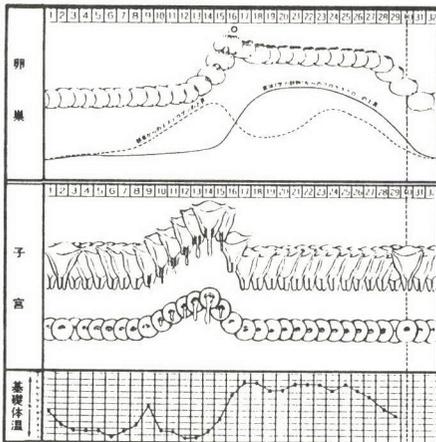
《外性器を科学する》

前述の外性器の調査結果を告げ、「外性器についてきちんとした知識を持つ。大切な体の一部として耳や胃と同じように科学的な目で、そんなにエッチでスケベな器官なのか調べてみよう」と呼びかける。下を向く子や硬い表情の子が多い。

私が手で形を作りながら、名称、形状、機能を説明する(資料2のA、B)発達の途上であること、個人差が大きいこと、色素沈着とマスタベーションは無関係であること等、実例をあげてくりかえし言う。

クリトリスは、手に触れる部分はわずかだが、内部で左右に分かれて広がり、膣、大小陰唇の血管と緊密に関係しあって働く、女性が快感を得るためだけに存在する

(資料1) 月経周期を通じた卵巣・子宮・基礎体温の変化



(「ピル、私達は選ばない」女のためのクリニック準備会編より)

器官だ。「気持ちよいことは、心にも体にもステキなこと。マスタベーションは自分の体とのコミュニケーション。外性器を宝物とか気持ちいい場所って書いてくれた子もいるんだよ」。まだまだ少女達の表情は硬い。

処女膜について話す。少女達の関心は高い。目の表情が違ってくる子がいる。「何の役にも立っていない、有るのか無いのか本人にも自覚できない、粘膜のうすいフ ril 状のヒダ。なぜそんなに気になるんだろう?」誰も答えない。ここでは初交イコール出血ではないという資

料を示すに止めた。

「手あそびしましょ！」（資料2）

A、Bを各自やってみる。気が進まなそうにやる子もいるが、気持ちがあぐれてくる。C、Dを説明抜きで作らせる。気づいてやめる子、笑う子。けっこう楽しんでる。ここで、同一原基を思い出させる。「小陰唇がくっついてペニスに、大陰唇がくっついて陰のうになるんだよ。妊娠15週くらいかな。調査で、女の外性器のイメージは、男子と違ってぜんぜん明るくない」って書いた子がいたけれど、男子のは女子のからでできるんだから男女の性器はかけ離れたものじゃなくて連続したものだって考えてごらん。くっついた跡は、大人になってもペニスの裏と陰のうに筋が残っていて、縫合線って呼ばれてるんだよ」。

《外性器観を科学する》①室町時代から戦前まで

「体の一部として勉強してみただけど、本当にエッチでスケベでいやらしい場所だったかなあ？」

首をふって答えてくれる子がいる。ありがたい。指名して感想を聞く。「どの部分もちょうど役割があって、人の体って本当にムダがないなと思った。あんまりエッ

（資料2）

(手あそびしましょ) 外性器、男女の連続性

① A ハヅ → X

 女性器の足を開いた状態。親指を隠して、人差し指どうしを合わせた甲を自分の体の前とあわせる

② B

 大陰唇を分けた状態。2本の親指が小陰唇で尿道口と唇口をかこんでいる。ここまでは女性の外性器

③ C

 男性器。そのまま4本の指をにぎりこんで陰のうとし、親指どうしをぎゅぎゅと付けてペニスとする。

④ D

 勃起した男性器。手指の角度を上げ、親指を立てると勃起したペニスとなる。うしろに、陰唇がくっついてあまった痕跡がすじとなって残っている（縫合線）

チとか思わなくなった。でもやっぱり恥ずかしい」「恥ずかしいや人に見られたくない気持は、当たり前なんだよ。性器は体の中でも一番心に近い場所だと私は思う。プライベートの原点。だから恥ずかしいのはごく自然な感情だと思うよ」と答える。

「科学の目で見れば、人体は本当によくできてるって素直に思える。それなのにどうしていやらしい場所なんだろう。月経観の授業のように、性器観の歴史を調べてみ

よう」、書きこまれていない表「外性器観を科学する」を配り、資料を読みながら考えてゆく。(資料3)

家族関係 — 民法 — を簡単に復習し、「恋は御法度」

(※1)を読む。当人達の気持よりも家や共同体の都合を優先させて、家父長が決める結婚。その中の愛と性とは? 「愛のないセックス」「例外だってあったよねえ」

「でも初夜はさあ、初めて会った男なんだし」「ヤダー」〃三年子無きは去る〃から何がわかるかな?

「愛し合うようになってでも追い出されちゃうの?」

「働き者とか性格がいいとか関係ないんだ。跡つぎを作る道具なんだ」「男の方に原因があるかも知れないのに」

「女の貞操、処女性は、どう考えられていただろうか?」

「テーソーって何?」「男は遊んでもよかったんでしょ?」「女の子は遊んでると嫁のもらい手がないって、今だって言われるもの」

「公娼制と廃娼運動」(※2)を読む。「借金に縛られて性の奴隷にならざるを得なかった少女達の商品としての体、性器は……」何と続ければよいのかわからない。

近所の子と意見交換をさせる。「妻の性器が跡つぎを作る道具だとしたら、娼婦の性器は何の道具なんだろう?」

(資料3) 外性器を科学する

	古事記、日本書紀、万葉集	室町、江戸、明治、戦時中
愛と性	愛、好き=性(自然体) 開放的、恥じらいがない	愛、好き≠性(ゆがみ) 閉鎖的、隠すべきこと
性器観	霊力-産む力→大切率直、おおらか、明るい	子産みの道具-大切 男性の快樂の道具-ワイセツ
処女膜貞操	重視しない	重視(不倫は死罪)
男と女の対等性	対等	上下(性の二重基準)
性の自己決定	自分で決める	不本意に性器を使用される
結婚	妻問い婚(個と個)	嫁入り婚(家と家)
暮らしの基盤	母系、氏族社会	父系、身分社会(家父長制)

出た意見を、「男性の快樂の道具」とまとめる。「大切だけどいやらしい」「男のための場所」「触れてはいけない場所」「監視の目を感じる」、これらのイメージは、室町から現在まで続く嫁入り婚と男性優位社会の中で、女自身が男の持つ女性器観や二重基準を内面に取りこみ、自分の価値観にせざるを得なかった歴史の置きみやげではないだろうかと問いかけた。

「エッチ、スケベは私達の足の間にあるんじゃないかと、見る側の色メガネにあるんじゃないかな。私達までそんなメガネを借りるのはやめようよ」

《外性器観を科学する》②万葉・日本書紀・古事記から
「悲しい歴史だね、男と女ってこんなもんだらうか」

万葉巻九、高橋虫麻呂の長歌を読む。

◎をとめ男のゆき集い かがふ濯歌に 他妻に我も交らむ わが妻に人も言問へ この山を領く神の 昔より禁めぬわざぞ 今日のみは

歌垣を説明する。驚く少女達。「子供ができちゃったらどうするの?」。母系で相続する妻問婚を例をあげて説明する。「家の娘の腹から出てきた子は、父親が誰であつても家の子としてその家で育ててもらえるんだよ。だから男と女は上下関係になりにくかつたし、性の二重基準もなかつたんだね」

日本書紀の謡歌を読む。

◎小林に我を引きれてせし人の面も知らず家も知らずも歌垣に参加した娘の事後感想だというと、スゴイ、ヤダーと言いながらも、活気づく少女達。好き、惚れた、だからもっと触れあいたい、そんなシンブルな愛と性。

生命と活力の根元である性を、いやしんだり隠したりする不健康さが無い文化、それを育んだ母系制。

性器観はどうだっただろうか? 「神々の結婚 古事記」(※3)を読む。「明るく話題にしてる」「国の歴史書なのに露骨」「イザナミの〃しか善けむ〃がいい。自分の意志をはっきり言ってる」

女と男、愛と性のイメージはふくらんだらうか。性ある体をもつ自分を、本当に大切にできるだらうか。

「自分のからだのことは自分で決める」、これは、性交するしなだけの問題ではない。たくさんの意志決定を内包している。◎北京、一人っ子政策で罰則強化 ◎生殖の商業化に歯止めを ◎レイプ妊娠、中絶はダメ◎出生率低下止まるの? ◎不妊に悩む心に理解を ◎妊婦こそ出産の主役 ◎元慰安婦の証言 ◎小学校長いたずら ◎忘れない富士見産婦人科事件 ◎考えよう、子宮

摘出

新聞の見出しから、意志決定を抑えこむたくさんの力が存在することに気づかせて、授業を終りにした。

※は『青年のためのヒューマンセクソロジー―21世紀を生きるあなたへ―』(一橋出版)からです。

● 聞き手 ●
稲邑恭子

インタビュー

図書館で偶然目に留まった一冊の本『性と結婚の民族学』。一妻多夫婚、女性婚……耳慣れない様々な結婚の、豊かな世界に魅せられて、大阪・千里の国立民族学博物館に和田正平さんをお訪ねした。

「性と結婚」をめぐる民族学的考察

和田正平



..... プロフィール

わだ・しょうへい。1937年、札幌生まれ。国立民族学博物館第3研究部長。1964年以来、アフリカ社会の民族学的研究に従事、サハラ以南のアフリカ19カ国を踏査。著書に『アフリカ昔話叢書・イラクの昔話』(同朋舎)、『アフリカ 民族学的研究』(編著 同朋舎)など。

*イスラム社会の女性の抑圧

稲邑 アフリカ大陸の北半分は、イスラム教の影響下にありますがよね。以前、板垣雄三さんのお話を伺ったときに、西洋の先進性の証左のように言われている「個の多様性の尊重」は、異端を抹殺するキリスト教ではなくイスラム教が元祖であると聞き、それなりに納得したところがあるのですが、それにしても、イスラム教の女性に対する抑圧のすさまじさだけはどうも合点がいかなくて。**和田** それは、イスラム教の男性原理の支配はすこいですよ。ヴェールに象徴される女性の「隔離」は徹底しています。家から出さないし、身内の者以外に顔を見せてはいけません。女性解放はトルコからやっと始まったけれど、アラブ諸国では地方に行くともまだです。

昔アラブの支配下にあつたタンザニアの海岸のザンジバルの古いホテルに泊まったことがあるのだけど、寝坊して起きたら、掃除の人に外から鍵をかけられたらしく、部屋から出られないで困ったことがありましたね。部屋が、外からかんぬきがかかるようになっていて。夫が外出するとき、妻を閉じこめるためなんです。窓には鉄格子がはまっていますし。

アラブでは、女は誘惑に弱い存在だからと、徹底的に隔離して機会を与えないようにするし、姦通は極悪罪として厳しく処罰されてきました。

稲邑 その同じイスラム教が、アフリカにいくと、なぜ幾分緩やかになるのでしょうか？

このご本（『性と結婚の民族学』同朋舎）の中にあつたのですが、アフリカやアラブでは、女性を生来ポリアンドリー（一妻多夫婚）的要求を持つものとみなしてそれに脅威を感じていることは同じであつても、アラブ人はそれを呼び覚まさないようにと徹底的に禁止抑圧するのに対し、アフリカ人は、それを認めて発散させることで対処する、というところが、とても面白かつたのです。子どもの時から性的に解放されていて異性と日常的にふれあつていると、お互いに認め合いやすく、隔離されていると、よけいに相手に脅威を感じて抑圧しようとするのかと思つてみたりするのですが。

和田 同じイスラム教でも、アラブのもの、チュニジア、モロッコなどの北アフリカのもの、東南アジアのものは、それぞれ戒律の厳しさなども違います。アラブのイスラム教の戒律は厳しいけど、それに比べて、アフリ

方は、地域によつては、お酒も飲むし、かなりいい加減。アフリカは民族的に開放的で、女性もおおらかに性を享受しているから、人間が誘惑に弱いのは仕方がないとおきらめているのか、女性の姦通や不倫も、よほど度重ならないかぎり離婚には至らないようです。

多妻婚の伝統が根強く、男は性体験が豊富だし、女も、処女崇拜の強い地域以外は同様に開放的だから、性交と結婚を直接結びつけるよりは、それはそれとして分離させる考え方。結婚後も、夫以外に、夫の兄弟や夫の母方叔父など親族との性交渉が公認されているけれど、このように夫の役割を補完する者を置くのは、夫が不在の時に外敵に備えて家族を守るためと、留守中にも妻に性的な不足感を与えないためらしい。調査の初期の頃、よく「日本にいるお前の妻は誰が面倒を見ているのか」と質問されたけれど、どうやらそれには性的な意味も含まれていたようです。

*父系制社会と母系制社会

稲邑 アフリカは圧倒的に父系制社会が多いでしょう。

私、この本を読ませていただいて、父系制社会だと、男の種の子孫を残すということが至上命令になるから、従

つて、処女性にこだわり、一夫多妻ということになり、必然的に女性に対し抑圧的になるということがすつきりと分かったのですが、アフリカの場合はそのあたりが意外に緩やかなんですね。父系制社会だから母系制社会だからという違いはこちらの思うほどにはないのでしょか？

和田 そんなことはないですよ。母系制社会だと、男は大変ですよ。いまは昔ほどではないが、おばあさんの存在は絶対ですから、顔色を伺わなければならず、ものを言うときはひざまずかなければならず、出ていけといわれたら着のまま追い出される。女はいくらでも、夫を取り替えられますからね。だから、離婚率は高い。家や畑など不動産は女が相続するから、つまり、経済的に自立しているということに等しいから強い。嫁入り婚のかたちをとる場合もあるのだが、喧嘩しても、実家に帰ってくればいいのだから。

ただ、いくら父系制社会の場合でも、アラブとは違い、簡単には妻を離婚できない。というのは、特にアフリカの農村の場合、女が働き手だから、出ていかれると男は困るんですね。男はいくらいばついても、酒飲んでだ

べつて政治をやっているだけだから。

稲邑 マリノフスキーのトロブリアンド諸島の調査記録を引用してあつた本を以前読んで、それがとても魅力的だつたので、これはもとの本に当たつてみなければと『未開人の性生活』（新泉社）を読んだのですが、結局よく分からなくて。トロブリアンドの人たちが、受精における父親の役割を否定し、また、性が解放されているのに私生児がほとんど見られないという話です。

和田 あれは一九一〇年代の調査で、一九五七年頃翻訳されたものかな。僕らが学生の頃は、彼のほとんどの著作を読まされたね。今、本当かどうか確かめるすべもないが、オーストラリアのアポリジニーがやはり同様に性交と生殖を結びつけない考え方をしていますね。

ただ、最近の研究では、どうもそんなはずはないと。彼らは一つの物語として精霊による妊娠を宗教のように信じていたのであつて、生殖の仕組みについて完全に無知だつたとは言えないのではないかと思う。その当時はそれくらい、夢みたいな話が支配的になる時代の空気があつたのかもしれない。

稲邑 夢があるほうが魅力がありますから。

和田 だけど、その背後に、その夢を必要とする仕組みが何かあつたからと思わなければ。それを考えるのが、文化人類学者なのだけれど。トロブリアンドの人たちがそう解釈して話すのはその民族の持っている文化の背景があるからなので、それはいったい何かと。

だって、そう考えたほうが便利なこともある。父親が誰か分からない、分からないけど授かつたものだからみんな育てようというほうが楽だし平和でしょ。そういう社会的必要性があつたから信じたのかも知れない。

*さまざまな結婚の形態

稲邑 なぜアフリカを研究なさつたのですか

和田 今と違つて簡単には海外へ出られない時代だつたから、どこへ行くのかという選択の余地はなかつた。外に出られるのなら、どこでもと。戦時中モンゴルの調査をしていた今西錦司さんが、戦後、日本で猿の研究をしているうちに、モンゴルの調査の延長線上に遊牧民の調査をしたくなつて、遊牧民も農耕民も猿もすべてのモデルがあるのはアフリカ大陸だからということで、誰かアフリカに行くやつはいないかと学生を募つたのです。

スワヒリ語は当時、英語のリンガフォンで独習するし

かなかつた。あとは、現地へ行つて覚えるしかない。半年したらしゃべれるようになり、一年ぐらゐして何とか調査できるぐらゐになつたけど、情報はほとんどなくて、当時はケニヤだつて領事館があるだけ。衣食住の基本的なところから、調べていつて、結婚のことなどはずっとあとになつてからで、何十年もかかっています。こんなテーマはそれなりの人生の経験を積んでからでない、とてもできません。

例えば亡霊婚の話だけど、そんな、死んだ人と死んだ人とを結婚させる話なんて、いちいち、今日やるから見に来て下さいなんて向こうから言つてきませんからね。日本だと東北地方にみられる人形を奉納する亡霊婚もあるのだけれど、身内だけでやるからわかりにくい。

稲邑 一妻多夫婚は、最初はふーんいいなと思つたのですが、よく読むと女の人の数が極端に少なくなつたり、貧しくて、土地の分割ができない場合が多いということは、これはいづれ消滅するということですか？

和田 確かに昔はもつとありましたね。女の人の数が少ないということは、つまり、女の子の嬰兒殺しをやつているということですから、それが人道的でないという理

由で禁止されると、男女の数のバランスは半々になり、当然、一妻多夫婚の必要性は消滅します。

ヒマラヤの場合だと、まだちゃんとい行われているけれど、彼らの場合は貧しいからです。一人一人奥さんをもらえないから、兄弟三人で一人。金ができたら、やはり、それぞれ別でということになるから、これもその意味では、経済状態が改善されると減つて行くでしょうね。

稲邑 女性婚はアフリカだけにみられるものなんです。初めは一体何のことかと思ひました。

和田 レズビアンではないんですね。不妊女性が、夫に第二夫人を迎えるという不利な事態を避けるために、自分が「夫」となつて女性と結婚し、その女性に子どもをつくらせることによって、出自集団の存続に協力する場合が多いが、資力のある女性が投資のため独立してやる事もある。夫になつた女性は、男と同じように父系的権威を持つていました。こういうふうな女性を男性に変えるイデオロギーは、もともと父系出自を存続させる必要から生じたものではあつても、これはすべての父系制に発達したわけではなく、アフリカ社会のオリジナルです。

稲邑 不妊女性や、閉経後の女性は、長老会議で男とし

て発言できるようになるとか、産まない女性の地位が保障されていることはいいなと思うけれど、女性が王位を継承したら、男であるとなされ子どもは産めないとか、要するに男と同一化したら女を切り捨てなければいけないのかと、女が企業社会にはいつて出世していくとわきのことみたいだなと、思わず、重ねて見てしまいました。

和田 この本を書いて五、六年たつけれど、この続きを書かなくちゃと思っているんです。なぜかと言うと、体外受精などで子どもが作れるようになって、婚姻の形態にまた、新しい要素が加わってきた。精子銀行、卵子売買センターもできて、子宮を貸す人も出てきたから、女同士、男同士でも子どもが作れる。かつての女性婚は自然体で、医者介在はなかったが、医学の進歩でこれからは違った意味の女性婚、男性婚が出てくる。

性と生殖が完全な分離が可能だから、女の人はあえて配偶者を選ぶ必要がなく、精子銀行に行きさえすれば、子どもを作れる。男だつてそれができる。そうすると、家族の形態が変わってくるでしょ。

稲邑 当然、結婚の意義も薄れてきますね。

和田 民族学なんかやっていると特に感じるのだけれど

も、戦後の日本の女性の地位に関しては、少なくとも家庭生活においては、諸外国と比べると、そんなに搾取されているとか抑圧されているとか言えないんじゃないかな。男女雇用法など、法的な改正が遅れているということなら、話は分かるのだけれど。欧米では、家計は夫が掌握しているし、男性原理による支配はもつと露骨で徹底していますよ。家庭内での女性の抑圧のことを怒るのだったら、タイやフィリピンからの出稼ぎ女性の惨状をどうにかすることを考えるほうが大事だと思うんですが。

僕は、フェミニズム人類学の女性学者と論争すると、感情的に反応されてしまうので、いつも黙ってしまうのだけれど、マルキシズムもそうだけれど、フェミニズムも欧米からの直輸入の思想だよ。欧米の人が言ったこと、その思考体系を、そのまま日本にあてはめて語って、世界のそれ以外の国々の文化や発想はあまり眼中にない。稲邑 そうかもしれないね。欧米的な発想が主流であること、思考の枠組みを狭めているんじゃないかということ、いつも感じています。その意味でも、欧米の思考が持つような「強迫性」から遠いところにある、おおらかなアフリカの話の伺うと、ほっとするのです。

寺島 紘子

性教育と フェミニズム



「異性愛」性教育

日本の性教育は「異性愛」教育になっている。多くの性教育は男女の対を特権的なものとみなし、異性愛の装置へと誘導する。私はこの「性教育」のシナリオのおかしさに、フェミニズムに出会う中で気づき始めた。そして「異性愛」の分析を欠いた性教育は、結果的に性差別につながるのではないかと。

社会は、性別にかかわる制度や決まりを作って、両性

を男らしさ、女らしさに振り分け、性別役割分業構造を形成している。それは、政治的にも、経済的にも、文化的にも男性支配のしくみとなっている。

このジェンダーによって両性が取り結ぶ関係の根っこにあるのがセクシュアリティの装置だ。肉体に由来し、変わることがないと思われている性的欲望や、性行動といわれるものも、歴史的、社会的なものである。

現在の私たちのからだや性愛に対する感性は、この社会的、文化的な制度やしかけの上に乗っている。それが女性に対する抑圧と搾取の「性の政治」になっていることを発見したのが、六十年代以降のフェミニズムである。このフェミニズムを学問的に体系化したのが女性学である。

両性の関係の不平等を覆い隠すのがロマンチック・ラブ・イデオロギーだ。男が女を好きになり、女が男を好きになり、愛しあって対になる。男女は違っているから

その違いを補いあって対を組むのだと考える。そんな男女の愛ってすばらしいと私たちは思っている。しかし、これは人が人を愛するとき最も安易な愛し方だ。恋愛に大きなエネルギーはいらないからだ。

多くのカップルが、対になることで、「自然に」主従関係になってしまうのはなぜか。女は愛があるから「女らしく」男の世話をし、男の要求を満たす。奉仕が愛の形だからだ。異性愛という装置は、女は男を愛するものと仕組まれている。そして結婚というシステムに入っていく。ここで女は自分がもってきた多くのものを主体的に捨てるのが現実だ。

近代の「愛のシナリオ」は女に対幻想という甘い夢を与えたが、女だけが自縄自縛の罠にはまったようだ。この愛が女性に自我を放棄させ、男たちの世界を支えた。今日、多くの性教育は、この異性愛の制度を補充する機能を果たしているのではないだろうか。「進歩的」な性教育も、両性間の不平等は問わないまま、性を「すばらしいコミュニケーション」と神秘化する。

不平等なジェンダー関係の中にあって恋愛だけが自由で平等であるとは思えない。「異性愛」の権力性やジェ

ンダーによる両性の構造的分断に対する分析を無意識に避けているようだ。

異性愛の枠組みは問い直される必要がある。このことは男性にとっても、「男らしさ」や、男根支配の象徴としての性器中心主義からの解放にもつながるのではないだろうか。

両性が自分の人生を、性にとらわれずに自由に生きることが可能となった時、その愛のあり方も今と随分違ったものになるのではないだろうか。

家庭科と性教育

「異性愛」性教育を家庭科の教科書で見たい。家庭科は異性愛と生殖からなる近代家族をモデルとして、その抑圧性と差別性を問うことなく、その家族の価値観を教え込んでいる。次のA社のものは、来年度から使用の男女共学「家庭一般」の「保育領域」の記述である。このA社の「生物学的決定論」こそ、性別という制度を宿命として受け入れさせる性差別的な言説である。

①性的欲求は人間の本能的欲求の一つであり、青年期における生殖器官の発達にともなって、この時期、性欲が

高まるのは、自然の発達のプロセスであり、無理におさえつける必要はないであろう。……生理的側面を例にとると、一般に男性の性欲の表現は、女性に比べ、直接的・攻撃的であるといわれる。だからといって男性がそれをすぐ行動に結びつけたり、女性^②が一方的に嫌悪感を抱くことは、お互いを傷つけることになるであろう。心理的側面にも社会的側面においても、男女差は見られるが、相手の性を理解し、男女が対等の立場で人格を認めあうことが、お互いの人間的成長に結びつくのである。」

(1) 性欲本能説。性欲を「生殖」器官と結びつけ、自分の意志とは無関係に自然に湧き上がってくるものと規定している。男性の性欲は直接的・攻撃的であるといふことは、女性の性欲は弱く、受け身であると言いたいのか。男女の性器の違いから性欲の現れ方にすでに男女差があるとすることは、生物学的基盤から、人間のセクシュアリティを説明しており、科学的に言っても間違いない。この説は、男性の性行動の責任回避と、性欲の処理としての性交の必然性を正当化する。また「性暴力」が性欲からおこり、しかも女性の刺激で衝動的に誘発されるのだから、被害者の方にも落ち度があると罪を転化して

はばからない「強姦の神話」にも加担している。

(2) 「女性が一方的に嫌悪感を抱くことは、お互いを傷つけることになる」とはどういうことなのだろうか。青年期において、多くの女性は、自分のからだだが、産む性であり、しかも異性の性的欲望の対象物として定義づけられた性であることに気づき、性に対して嫌悪感や恐怖心を抱く。「セックスというものが、恋愛なしに行われるとしたら、女の子にはこれほど恐ろしいことはありません」(小倉千加子『女の人生すぐろく』筑摩書房)。

この時期は、自分のからだに得体の知れない闇を抱える時なのではないだろうか。

(3) 「心理的側面にも社会的側面においても、男女差は見られるが」とあるが、この文脈において男女差は生物学的基盤から生ずると読み取れる。「相手の性を理解し」とあるが何を理解するのだろうか。「男女は対等な立場で人格を認めあう」というが、女性差別撤廃条約には「区別は差別」であると書かれている。心理的、社会的に違っていると言いながら「対等」をいうのは矛盾している。

男と女はからだが違う、だから心も違う、従って、男

は男らしく生き、将来、父となる使命を自覚せよ。女は妊娠・出産という母性機能を持つので、将来、母となるための役割を自覚し、今から次世代の健康を担っていることに留意せよ。そのためにも望ましい性行動と健全な性モラルを持ちなさいと教科書は説く。

女性差別撤廃条約には、女性が産む機能を持っていることとその機能を行使することとは別であり、産む機能の保護以外の区別や排除や制限の理由とはならないと述べられている。男女共学は、条約の批准を受けて誕生した。しかし、男女共学の家庭科は性役割を温存するのに熱心であるといわれてもしかたがないだろう。

「異性愛」を相対化する

池谷壽夫は学校での性教育について、1. セクシュアリティの性器とジェンダーへの固着からの解放、2. 女性解放および男性解放、3. すべての人間の「性的自己決定権」の保障という3つの視点をあげている（『セクシュアリティと性教育』青木書店）。

セクシュアリティの性器とジェンダーへの固着とは、「異性愛」の装置への固着ということであろう。そこか

ら解放されるためには、既存の異性愛の枠組みを分析し相対化することによってしか近づけない。その試み（女性学）を通して「異性愛」の支配性や欺瞞性を見直すしかない。女性がセクシュアリティ（性と生殖）の自己決定権がないということは、不平等なジェンダー関係の中の相互的な力学として現れているのだから。

今、「愛」は異性愛に偏在している。性愛は経済と結びつき、男女が対にならないと生きていきにくいしくみになっている。しかし人間は対になる前に個人なのだ。自分のからだの決定権を持つために、性の知識が必要なのである。

性愛がジェンダーからもセクシュアリティの予定調和的な装置からも自由になった時、そのあり方はどのように多様に広がっていくだろうか。

女性学は知識変革の学問だ。性教育にも女性学の導入が必要なのではないだろうか。

（石川県立金沢二水高等学校）

秋波水魚子

あなたの隣にいる レズビアン



ついて、社会的構造とからめて話をしました。わたしが最後のしめくりに言ったセリフと、それに対するカウンセラーの河野貴代美さんの言葉が、前出のやりとりです。

河野さんがわたしのセクシュアリティを知ってそれを頭に置いていたら、あの言葉は出てきたかなと、後になって思いました。(個人攻撃をする気は毛頭ありません。河野さんにはシンパシーを感じています)

「わたし、一生結婚しないとします」

「あら、まだ、わからないじゃない。そう決めてかからなくても」

一九九〇年にフェミニスト・セラピーへなまかまVが主催するセミナー合宿へ自分を変えるVに参加して、「自己発見のトレーニング」をしていたときのことでした。確か「女性差別について」というテーマが出て、わたしは両親の抑圧的な夫婦関係を目のあたりにして育ったこと、たぶんその結果として起きた母の私に対する虐待に

しかし、自分が感じている結婚制度との確固たる距離が伝わらなかつたことにもどかしさを覚えながら、その時は思いを言葉にすることができませんでした。参加者の多くが、中高年の主婦層で、自分とセクシュアリティを同じくしていそうな人が、見当たらなかつたこともあったし。それに当時のわたしには、自分があつた汚れたイメージ、性的な面ばかりが、しかも歪んだ形でまわりついている「レズビアン」だと認めるにはあまりにも抵抗があつたから。もう、自分の同性愛者性から逃げ回る

のはやめようと覚悟を決め、言葉が汚れているのなら、それを書き換えてやろうぐらいに思っている今のわたしだったら、波紋を投げかけることになるだろう一言が言い出せたかもしれません。

——わたしが人生の伴侶、連れあい(?)に選ぶのは、これまで自分から惚れた人がいつも女性だったように、女の人だろう。もし仮に結婚したいと思っても、相手が女では、制度の方が認めてくれないじゃない……。

わたしの皮膚感覚では、結婚は自分にとってはひどく距離のある選択です。



ところで、なんだかカウンセリングの話ばかりになってしましますが、先日、一〇月二日・三日、大阪市立大学で「第一回フェミニスト・カウンセリング全国大会」が開かれました。主催はフェミニストカウンセリング全国大会実行委員会、ウイメンズセンター大阪です。そこでワークショップのひとつに「レズビアニズム」というテーマが立てられました。

ハンズ・オン・ハンズ(※1)のLesbian studyをオーガナイズする中で、「女と女の力関係」を中心にセル

フ・ヘルプ(自助)を試みたわたしにもお呼びがかかり、当日はパネリストのひとりになりました。

集まりの冒頭、司会の川本さん(「レズビアン・セラピーの会」のメンバー)が、「女を愛する女は実際に存在する」と念を押していたのが、なにか象徴的でした。

「なんだ、そんな当たり前のこと、今さら」と思った人もいたかもしれませんが。

「日本人は単一民族ではない」のに、そうであると、時々勘違いしている人がいるし、知識として知っている人も忘れてしまうことがあります。もちろん、自分自身が少数派に属する人は、忘れることはまずないと思えますが。

ハマイノリティは、いつも言うことがあるVのです。

そしてセクシュアリティに関しては、民族問題以前の状況があります。特にレズビアンは、今もって、透明人間のように人々に見えない存在です。

この会にわたしを誘ってくれて、当日パネラーを共につとめた掛札悠子(※2)さんは、マスコミにもカミングアウト(自分のセクシュアリティを表明すること)している少数派、まだ例外中の例外です。

このワークショップの終わりごろ、参加者から「カウンセリングをする際に、あなたのクライアント（相談者）はレズビアンかもしれないということをいつも意識していて欲しい」という発言があって、「その通りだ、いいところを突くなあ」と感心しました。

「セクシュアリティは単一ではない。ヘテロセクシュアルばかりじゃない」と意識しているのと、それが念頭にならないのでは、まったく違います。ヘテロセクシュアルを前提に対応されたら（それが現状なのですが）、そうではない人にとって抑圧や差別が生産されるし、カウンセリングは本質にたどりつかないでしょう。

そういう意味では、レズビアンが取り上げられたこと自体は画期的なことだったとは思いますが、本来無関係でいられるカウンセラーはいないのだから、小さなワークショップの単位で取り上げるのではなく、セクシュアリティの一環として全体会で討議する必要があったと思います。（「セクシュアリティ」という議題そのものが、この大会から抜け落ちていたのです……）

◇・◇・◇

このワークショップの中で、参加者から「言われて嫌

なことがあったら、教えてください」という質問がありました。

わたしは「ステレオ・タイプ化されるのが嫌です」と言いました。レズビアンは髪を短くしていて、攻撃的、男っぽい女 etc、世の中にはある一定のイメージが流布していて、レズビアンに対する視線を硬直させています。

「わたしが *lesbian study* の活動をするようになって何が良かったかって、実にさまざまなレズビアンと出会えたことです。みんなとても個性的で、レズビアンとひとくくりにしていいのかと思うくらいです」そう言いながら、この半年の間に *lesbian study* に参加した延べ二〇〇人あまりの女性たちの顔を思い浮かべていました。自分の同性愛者性を受け入れてから、わたしの人生は格段に豊かになりました。

さて、このようにカウンセリングの場でも、ヘテロセクシュアルを前提に対応してきたカウンセラーの性意識が問われ始めていますが、教室の中ではどうなのでしょう？ あいかわらずレズビアンの教師にとっては、カミングアウトは困難な状態です。ゲイではカミングアウト

トしている方がいますが。わたしは特に多感な思春期にある学生がどういう扱いをうけているか、とても気になっています。

高校一年の時、私は担任の女性教師に呼び出されて、「あなた、○○さんとずいぶん親しいみたいだけど。あなたたち、どういう関係なの？どこまでいってるの？」と問いただされたことがあります。自分でもあの同級生の彼女との親密な関係をどう定義してよいかわからなかったけれど、とっさに、「トモダチです！」と声を大にして返答していました。教師の干渉から、関係をなんとしても守りたいという一念でした。わたしは彼女に対してほんとうに真剣な気持ちだったけれど、今思うと、ぞっとするほど孤立していました。

また、中学生の時は、父母面接から戻った母に、当時私が大好きだった担任教師の口から「お嬢さんもういづれ（女性を好きになるのは）治りますよ」と言われたと聞かされました。大学時代、偶然その先生に再会した時には、「先生、治りませんでした！」と言いたい衝動に駆られました。

くだいようですが、同性愛は問題行動でもないし、治

るものでもないし、まして治療対象でもありません。もう、暗黒時代に終止符を打ちたいと願っています。

それにはもちろん、様々なセクシュアリティの人が、自分たちの多様なあり方について語ることが必要ですが、その事実を否定せず、歪めもせず、受け入れる人々の存在が不可欠です。『We』の読者のあなたも、そのひとりになることを期待しています。その出会いは、あなたの人生を、あなたのセクシュアリティに対する意識を、きっともっと豊かにしてくれるはずです。

(フリーライター)

(※1) 一九九三年三月に、新宿にできたエイズ救済とレズビアン&ゲイのためのスペース。関連書籍や資料を販売する他、Lesbian study や Gay study の連続講座や、エイズに関する講演、催しなどが開かれている。

▼連絡先 東京都新宿区新宿1-17-1

ランデンビル1F ☎03(3356)2055

営業時間/午後2時~10時 年中無休

(※2) 『「レズビアン」である、ということ』(河出書房新社)の著者。



座談会
おとこの
の
セクシュアリティ

おとこの性は本能か？

料理教室主宰
味沢道明

日雇労働者
水野阿修羅

司会
吉田清彦

*男性性を見直す

吉田 メンズリブ研究会では、女を排除して男だけで話し合っていると聞いているけど、僕なんか、五回のうち一回くらいは女も入れてはどうかと思うんだよね。

味沢 言いたいことは分かるよ。でも、僕らにとつては、まず、女の人たちと話し合う前段階として、自分の中の男性性を見直す作業が必要なんだよね。女の人たちとやり合うことをわざわざしなくても、メンズリブなんて看板を掲げているとただでさえ注目されるから、日常の中で十分晒され試されていると思う。それよりも、自分で自分のことが分かっている段階で話し合っても、相手に振り回されるだけじゃないか、と。

吉田 そうだね、男が訥々と話し出したときに、女に公式論でわあつと言われると何も言えなくなってしまう、という面は確かにある。ただね、個々の女と男の関係性の中で、男のセクシュアリティが問われることはあっても、男同士話し合うときには、どれだけそのことを意識しながら話しているかは、なかなか難しいと思うよ。

水野 でもね、基本的に僕たちが問題にしているのは、男自身の問題、自分の男としてのセクシュアリティの問

題であつて、男と女の關係をどうするかの問題ではないんだよね。女との關係性を求めない人だつてゐる。それに、フェミニスト達と話すとき、いつも、男一般としてくくられてしまうけど、僕は自分自身の性は語れても、男一般の性は代表して語れない。

吉田 でも、男全体としてやっていることを、俺は關係ないよと棚上げしておいてはずるい、と言われたらどうする？ 男社会というのがもしあるとすると、それを變えていくのは男の責任ではないのか、と。

水野 それは、個々の責任において生活の中でやっているとしかしいようがない。僕らの言いたいことは、とりあえずは、お互いを理解する前にまず、自分自身を突き詰めてみよう、そこから始まるのではないかということ。女たちはやってきたのだからうけれど、なにしろ、こちらは、それを始めたばかりだから。

吉田 だから、それは、どっちが先という問題ではない、どちらも必要なのだと思う。僕が言いたいのはね、例えば、男の性は攻撃的というのはほんとうだろうかということ。男が男同士が喋つても、限界があつて、結局、男に都合のいい結論しか出ないのではないかということ。男ら

しさへのとらわれを男同士で検証していくのもいいが、女の側の疑問に一つ一つ答えていくのも、一つの有効な方法だと思ふんだが。

自分を分かる方法がいろいろあつて、いま言われたように、男同士が喋る中で、同じ男なのにこんなに違ふのかと、自分を相対化していくやりかたもあるが、その前に、特定の相手との間でとことん話し合うなかで相対化することが、なぜできなかったのだろうか？

僕なんかはお寺の子だったから、小さいときから性の問題はタブーだったわけで、三十越えるまで、ベットの「無言」の中で、性をめぐつて話をする事もできなかった。「無言の行」だから、相手がどう感じているかとか、何を期待しているかとか、想像したり「察する」しかないのだけだ、相手が傷つきの恐れて思ひやる事が、かえつて裏目に出てしまう。そのうち、やはり言葉も必要なんだとだんだん分かつてきて……。

味沢 なぜ、性をオープンに語りにくいのだろうか。前近代の社会では、飯を食ふこととセックスは同じレベルのことだったのに。

夜這いの聞き書きを本にまとめた赤松啓介さんが、大

正時代ぐらまでの性文化を掘り起こしているのをみると、私たちの感覚とは全然違う解放された性的な日常があり、驚くほど性がフランクに語られているのに驚いてしまう。近代化って、こんなにも性を抑圧していく過程だったのか、と。

*性を語る

吉田 自分の性を語るといつても、男同士集まっても、そんなに差がないというか、他人と違うと発言しにくかったりしてなかなか本音を語れない。男の情報は量があつても、どれ見てもワンパターンというか、マニュアル化されたものが多い。でも、女達はその点、「アンタ、そんな生き方してるの?」「そんなセックスしてるの?」とかいう個別の生身の話を、そのあいだ、この十年とか十五年とかのあいだ、ずっとしてきたんだよね。だから、ある意味で、女達の情報の方が多様化している。

水野 いくら、今、情報が溢れていてその中から選べるといつても、今の子どもたちは、小さい頃から、主体的に選択する時間や場が与えられているかという、ほとんど無い。二十歳くらいになつて、さあ自由に、といわれても、完全に刷り込みが終わつて価値観が固定化して

いるから、そのときにいくら情報を出しても選べない。そういう意味では、小さいときから、家でも学校でも、多様な情報を流していくことが必要だと思う。

吉田 でも、多様な情報をいくら流しても、情報とのつきあいかたみたいなのが、そもそもマニュアル化されているでしょう。とにかく、参考書を覚えてもダメ、生身の相手から直接聞きなさいという教え方をしないとダメなんじゃないか。

目の前の相手から聞けばいいのに、「女はこうで、男はこうで」という、ほかから来た情報にふりまわされて、一所懸命に得た情報で一所懸命演じ合つていて、結局、とんちんかんなことしていたりして。

味沢 でも、いくら、相手から聞くといつても、対話の仕方を知らなければ、脅しになつてしまうんじゃないの。

水野 そうだね、まず、対話する以前に対等な立場でものが考えられるかということ。日常生活で権力持つつて、セックスだけ対等にといい話はないだろうから。

*男の性欲は抑えられないか

吉田 男の性欲は抑えられないというのは本当だろうか。味沢 ぼくは、やらなきゃというプレッシャーが、性欲

として出ているんじゃないかと思う。個体差があることが言われているから、バリバリ働いて、性欲が強いのが男らしいとか、性欲の弱い自分は男らしくないんじゃないかと思われていると思う。

吉田 僕も性を否定的に見る文化の中で育つて来たからか、どうやったら抑えられるか、と思つていた時期があった。でも、そういうところはしようがないと肯定しないとしんどい。今は自分にも性欲があるしと、折り合つてつきあえるようになった。生理的欲求があると認めただ方が楽だし、そのことと、それをどう表現するかは別問題でしょう。いままで、それをごちゃごちゃに論じてきたからややこしくなつていたのでは。

女性の場合も、性衝動があるんだと認めただけが楽な部分があつて、ないというのは、そう思いこまされたのではないかと解釈できる。

味沢 ただ、男の場合、そういう、女の人の場合のような分析も何もなくて、とにかく男の衝動は本能でどうしようもないもの、自明なものだとされてきた。それに対し、フェミニズムの側から、男の性衝動をどう抑えるか、という問題意識が出てきた。でも、それはちよつと待つて

くれ、と。「男性衝動は犯罪的、ナンセンス」と一蹴する前に、男自身に自分の性衝動を分析させてほしい。それが社会的に作られたものなのか、男達がそれぞれの性衝動の違いを持ち寄つて語りあわないと、見えてこないのではないか。

重度の障害を持つ人と暮らしている男の人の話なんだけど、彼らのセックスというのは、勿論性交はできないんだけど、ふれあつていただけで気持ちがいいというのね。最初聞いたとき、えつと驚いたんだけど、ああ、そういう男もいるんやなど、それもセックスなんだなど。その話聞いてよかつたですね。男にもいろいろいて、性交だけがすべてでない。

吉田 フェミニズムにはずつと「男嫌い」の時期があつた。男を変えようなんて徒労だから、置いてけぼりにしていい、と。それが、この頃、お互いに理解しあう時期に来ていたという声が、一部のフェミニズム潮流から出てきた。理由はいろいろで、「男も変わる可能性があるから」というのも、「男が居ないと面白くない」というのもあるが、そういう動きに、どう応えていくのか、中途半端なかたちで出ていって、また叩かれるか？（笑）。

おんなのセクシュアリティ

性について

ワイワイ

ガヤガヤ

木田 薫(26歳)
野沢逸美(29歳)

高山恵子(28歳)
木本昌美(31歳)

河村ふみ(司会)
田村恵(まとめ)

司会 今日、「性」について普段考えていることとか、感じていることなど何でも話そうということで集まっていたのですが、まず、どんな性教育を受けたか、というところから始めましょうか。

木田 栃木の女子高だったんですが、一部屋に集められて、ビデオを見せられたのね。それが、すごい汚な〜いアニメーションのビデオで、ペニスがボッキするとか挿入のシーンとかがアニメでエグく映るわけ。男性の陰部はこうなってる、女性の陰部はこうなってるというのが大股開きのシーンで、もう、ほとんど、ねじめ正一のマンガ読んでるみたいな。

木本 私の場合、お医者さんが来て、講堂で、黒板に絵とか貼って説明してた。高校二年だったと思う。

野沢 そういう「性教育」で出会ったものって、すでに知ってるものを知らないふりして聞いてあげる茶番劇だった？

木田 すでに知っていて、ものすごくきれいにイメージしたものをひきずりおろさ

れたみたい。

司会 知っていたというのは、何で知ったんですか。

木田 父親がバイオレンス小説ものをいっぱい持っていて、それを読んでいて、小学五年くらいの時に、こういうことをするのかと思った。最初にわかったのはそれですね。

野沢 私も最初に出会ったのはそれ。SFとか読んでいても、そういうのって必ずセックスが出てきますよね。

高山 私はコバルト文庫だったね。富島健夫とかもイヤラシかったんだよ。おじさんに手ほどきを受けて初めてセックスする話とか、みんなで回し読みしてたけど。中学生の頃は、性教育ってなくて、生理の話とかを家庭科の時間にやっただけかな。男子を追い出したときにやる授業だから何も聞いちゃいないよね。高校に入ると、みんなとうに知ってることやってる、可哀想だから聞いてやろうみたいな感じだった。

木本 私は高校生の頃まで本当に全然知ら

なかった。赤ちゃんはどこから来るかを知らないわけじゃないけど、具体的にどういうふうに行われるのか、というのは、学校で説明されて初めて、「ああそうか、入れるのか」とすごく印象深く覚えてる。

一同 じゃあ、性教育って役に立ってるんだ（笑）。

木本 うちの父親もエロ本とか隠してる人で、それを読んではいたけど、実際にどういふふうにイタすか、ということは、その性教育の時、具体的に示されて初めて、ああそうか、とわかったんですね。

野沢 からのみのシーンとかあったって、具体的に何してるかなんてわかんないもんね。木本 少女マンガなんかだと、からのみの

シーンはその部分にはバラとかしょっててボカしてあるし。私はそういうのをキチンと知っていたから、明確にならないとわかったという気にならなかったと思う。

司会 他の方は、知った時にはセックスに美しいイメージを持っていたわけ？

木田 美しいというよりも気持ちよさそー

って思った。

野沢 そう思えた人は幸せだと思う。とてもしうは思えなかった。私は最初にセックスに出会ったのは、SF小説だのバイオレンス小説だの、暴力的なんですわね。そういう中で自分の中に被虐性みたいなのがさちやっただと思う。たとえば犯される願望

は、フェミニズム的立場からいうと、そんなのは男がつくった嘘だとかいうけど、自分の中に確かにあるんですね。それを社会的につくられたという言い方もできるんですけど……。汚い暴力的なものの中でイメージがつけられてきたから、セックスなんてイヤだ！ みたいになっちゃって、気持ちよさそうだなって思えない。

高山 私なんか、楽しそうなことしてるな一って思ったけどね。

野沢 男が女に「どうだ、恥ずかしいだら」みたいなことを言ってる場面が、刷り込まれてしまっていて、恥ずかしい、汚いものというのが強くて、自分の性器なんかも自分で直視できない。だから、スベキラムで

見てみようなんていうのも、とてもできないと思う。

高山 イメージと現実はずうでしょ。現実の世界でもやっぱりイヤなの？ 私はマゾっぽいところはあって、本とかは、暴力的なシーンとかへへへって読んでるけど、現実の男とのセックスは別。

木田 私は面白そうだなと思ったら取り入れちゃう。言葉でイビられたりとか。言ってもらってヤダなと思ったら今日は言うのはやめてって言えばいいんだし……。

司会 ゲーム感覚なんだ。

野沢 被虐的な部分を持つてるといいうのは、そういうので欲情する部分もあるし、もうひとつには自分が主導権を握っちゃいけないと感じてる部分もあるのね。そういうふう

に自分の被虐性をゲームにするっていうことでセックスの主導権を握って楽しむことも、なんかいけないような、下品なようなイメージがでちゃってる。

木本 でも、男性を欲情の対象とすることについて揺れは全然なかったわけ？

野沢 それは、女の人を好きになるってこと？

木本 今の世の中でセックスするようになったら普通は男を対象にするよね。でも男とのセックスにそんなに嫌悪感を持っているなら、なぜ女性に向かわないんだろう。

木田 そういふのあったけど。中学の時、すごく好きな女の子がいて、毎日毎日セックスできたならなって妄想してた。

一同 へえ。

高山 私は触覚とか肉感で、オイシソーだと思ふかどうか。私の場合、筋肉質が好きなわけ。華奢なだけで筋肉がスツと浮き出るようなのがね。だから当然男にしか目がいけないわけ。最近変わってきて女の人の柔らかそうな肉もいいけど、セックスしたい、には結びつかない。多分ブレイキかけてるんだと思う。

木本 私は実際の性経験というのは全然ないんですよ。男性とも女性ともね。それだけじゃなくて、この間まですごく好きだった人は女性だし……。今ですごく好きに

なった何人かの人には男だったけど。自分がどういふセクシュアリティを持っているのかというのを、頭でっかちに考えてしまっているところがあるのね。三十になるまでそういう個人的環境をつくってこれなかったという後めたさもあるわけ。実際、歳とってきて、そういう経験がないってことが、自分が人間が通るべき発達過程を通りすぎていないんじゃないかと、自分の中で負い目になってきているのね。これを話すのもすごい抵抗あるんだけど……。

司会 男性と個人的につきあったことはあるんでしょ？ デートしたりとか。

木本 ない。あるんだけどデートだとは思ってなかった。相手の男の子は私を好きだったんだけど、私は恋愛の対象として見てなかったから、デートだとも思わなかった。そういうつきあい方しかしたことない。

この人を好きだなと思う時には、この人とセックスしたいという気持ちはあるわけでも実際の行為には結びつかない。そうならない相手を選んで好きになるのかも

しれない。そういう関係性を築くこと自体がいろんな意味でできなかったわけだから、性教育なんて私にとっては意味なかったんだと思う。今の少産化時代に対策になるような性教育をしようというんなら、そういう関係をつくることからやらないと意味ないなあと思う。実際そういうつきあいをできなかったというところが一番大きな負い目なんだろうね。

高山 負い目を負う必要は全然ないと思うんだけど……。

木本 みんなにそう言われる。

高山 というのはセックスって関係の一部だけど、すべてじゃないし、それがいいからって関係をつくってないとは全然思えない。

野沢 私も木本さんに近い。けど、私は開き直ってるから、負い目に思うより、なんで負い目に思わせられるんだらうと思う。負い目に思わせるものが世の中には充満してると思うんですよ。

木本 人を好きになる時って、パワーアッ

プしてゐるなって感じがあって、そういう意味で、すごく動物的に生きたいよねって思う。それと、人間的に欠けているんじゃないかってずっと気にしてきてる、普通と違うといわれてきたし。男の子にモテないタイプかなと自分では思ってきたけど、まわりの女の子たちからカッコイイって言われてたから、カッコ悪いからモテないんじゃないって、それで全然平気だったわけ。ルックスに自信がないわけじゃなかったし、モテないから自分の価値が低いとはとらえてなかった。

木田 人間のつくる関係の中で、セックスを介した関係をつくってないから「人間的に欠けている」んじゃないかと思うわけ？
本本 セックスを「ひとつの関係性」としてはとらえてないのね。小学校、中学校、高校、大学と通過していく中で、実際に経験していくことであるわけでしょ。具体的には、たとえば「人をいたわることを学ぶ」とか、そういうのと同じレベルで、「セックスを経験する」ということがあると思

うのね。私という経験の集合体があるとしたら、その中のひとつの要素として、「セックスを経験してる」ということもあると思うの。

だけど最近、いろんなセクシュアリティがあるとしたら、同性愛とか、異性愛とかと同じようにバージニティってのもあるんじゃない、と言われて、逆にそう言われると、じゃ「セックスの経験を持つ」っていうのは自分にとってどういう意味があるのか、またそこで頭を使わざるを得なくなってる。

高山 いいんじゃないの。やるんならやる、やらないんならやらない。
本本 やりたい相手が、やろうって言うてくれないから。

高山 やろうって言うんだよ。
本本 やろうと二回くらいは言ったことあるんだけど、一回目は「じゃ、ちょっと行こうか」となったら、相手がすごく古い結婚観とか持ち出してきて、あきれてしまった。2回目は結婚が決まってる人で、誘っ

ただけど、冗談ですまされてしまった。いまは、そういう気持ちか重なる人を待つって感じかな。相手は誰でもいいような気もするけど。

野沢 それは本当に誰でもよくて行動にうつるんじゃないかって、誰でもいいような気がするだけ？

本本 どうなのかなあ。でも実際は二人きりになるチャンスをつくろうともしてないから、そこまで思い詰めてないんだと思う。本当に誰でもいいのなら、どっかに男探しに行けばできるかもしれないと思うけど、イヤ待てよ、こんなんでもいいの、こんなふうに自分を粗末に扱っていいのと思ってる。

本本 私も誰でもいいやって思う時があつて、二万円やってくれるんなら誰でもいいや！（笑）

野沢 二万円もらうの、払うの？。

木田 払うの。

本本 私も、ホストクラブとかに行ったら理知的なのとか、好みのタイプがいるかな

って思うもん。

木田 それ、いいなって思うけど、でも今お金無いし病気のこととか考えたらこわいしなあとか、あとでユスリのネタにされたらとか、そういう恐怖心で、しかたないから帰ろう、となってしまう。

野沢 それは考えてみなかったけど、いい手かもしれない。

司会 自分の中に単純な動物的な性的欲求ってあるよね。男性はそこがはっきりしていて、お金払ってやる。しない人ももちろんいるけど。女性はそういう欲求がないというのウソだよ。

高山 女性が男性をあまり買わないのは、そういうシステムがないからだし、そのままレイプされたらどうしようという怖さがあるから。それが、システムがちゃんとしてて、ちゃんとコンドームしてくれるんなら、考えるよね。

木田 言うことをちゃんと聞いてくれて……ならね。

野沢 奉仕してもらってのがなんかヤダ

な。奉仕させてる自分がまるで女王様のようにじゃない。

高山 そこがいいんじゃない。

野沢 私のイマジネーションの中で、私がエロスを感じるシチュエーションと違うわけよ。自分で仕組んで違う役回りになったとしても、仕組んだのが自分だと思うと、イヤだなと思うし……。

木田 奉仕するほうが好きとか？

野沢 それもやだな。

高山 泣きながら犯られてしまうと……。

野沢 そのほうがいいんですよ。

一同 (笑)

野沢 実際それはイヤなんだけどね。それを遊びでやるのもイヤなのね。

木田 協定しておいて、こういうシチュエーションでやってっていうのは？

野沢 そういう段取りした自分を知ってるからダメ。イマジネーションを現実のセックスに持ち込めないエロス感を持つてるわけでしょ、私は。じゃあ、みんなが豊かな性というような二人でいたわりあって楽し

むような明るいセックスというのを想定してみると、そういう対等でお友達で、終わったらお茶碗も洗ってくれるみたいな間柄で、したいとも思わないのね。

だから、今までつきあった男も、女と対等でもいいよとか私とつきあって刺激があって面白いとか言ってるタイプだから、一緒に暮らすにはいいかもしれないけど、セックスする相手としてはエロスを感じないなあ……。

田村 最初はエロスとかこだわっても、ずっと一緒に暮らしているとねえ……。つれあいにやろうよとか言われると、めんどくさいけど、「茶碗洗ってくれたらいいけど……」なんて。で、「ああ、茶碗洗いのために私は体売ってしまった」。

一同 (笑)

司会 セックスって、エロスとか恋愛感情とかだけじゃなくて、人肌恋しいとか、触れ合っていたいとかいう気持ちからするところもあるでしょ。

高山 私は、もうここ一年くらいしてない。

ただ、じゃああっている。それで相手もい
いみた。

野沢 そういふのだといいなあ。

木本 私は人と手をつないだりするのも苦
手で、知人が遠くに行くのを見送りに行っ
て、握手したいのに手が出せないこともあ
った。いろんな意味で抑制しててできない
ことがいっぱいある。その中のひとつとし
てそういう関係性があって、いつも変わっ
てると言われるのを気にしてきたから、何
とかフツーになりたいと思ってきた。

高山 大変だね、自分の思う通りにやって
ないんだ。

野沢 さっきからセックスってするかしな
いかの違いだとか、したいならしないう
て言えいとか言ってるけど、そう言える
のは、そう言える相手との関係があって自
分からしないうて言える状況があるからで
しょ。

高山 そういう状況じゃなくても、自分が
したいと思えば二通りあって、私は「した
い」と言わせる、「したい」という状況に

追い込む。網かけて待ってる。

野沢 そういうノウハウを知らないから。

木田 私もわかんない。高等なテクニク
だね。私は自分から言ってたの、相手に彼
女がいろいろなんだろうが、したい場合は
ね。だからそれはうらやましい、どうやる
のー？

高山 目でわかんない？ 私も断られるキ
ョーフってあるから、コイツは絶対大丈夫
と確信しないと網張らないけどね。

最近よく言われるのは、セックスしたく
ないんだよねとか、ときめく男の人が欲し
いとか言うのと、あんたがそんなこと言える
のは一人安全パイをつかまえてるから言え
るんでしょって。

野沢 そういう気持ちわかる。Weの「男
の解放・女の解放分科会」の記録に、一人
の相手に丸ごと求める「丸ごと派」と、機
能別に何人ものパートナーを持つ「機能派」
の論争が出てくるのだけど、「機能派」の
主張をしている男性には満足はいくパート
ナーがいるのかなと思うと、私みたいに全

くシングルでもそういうふうに見えるのか
なあと思っちゃったんです。

というのは、機能を分担して、この人と
は同居して、この人とはセックスしてって
いうのも、相手のニーズと合うかっていえ
ばむずかしそう。で、特定の人との関係は
結べないだろうなという予感があるわけ。

このままいくだろうなとすごく不安になる
時がある。だから彼と同じことを頭で考え
ていても言い切れない。「安全パイを持っ
て言うんじゃないの」という言い方は、
すごくわかる。

高山 役割分担をするにしても本人が納得
していればいいんじゃないかと思う。全部
をその人に求めて、という関係もあるだろ
うし、それも時と場合によって変わってく
るし……。でも、なんでこんなにセックス
って特別視されるんだろう。恋人か友だち
かがセックスするかしないかで分けられると
か。

野沢 するしないで分けられないと思う。私
はセックスストレスだから、セックスするしな

いじゃなくて、カッコイイと思うかどうか。
木本 カッコイイ人とは友だちになれないの？

野沢 そうじゃないけど、恋愛感情があるかどうかでしょ。

木田 私の中ではセックスする相手と友だちとはニュアンスが違う。した相手とはだんだんにその人の前ではオナラしても大丈夫とか、風呂上がりにあついよーって裸で寝ても大丈夫とか、自分の生活を丸ごと見せちゃえるみたいな感じ。

司会 セックスすることによって、羞恥心がなくなるとか？

木田 した相手に対して、特に裸に対する羞恥心はなくなるよね。

高山 セックスをいっぱいしてた頃のあなたは、なんでもしてたんだと思う？

木田 その時は相手が一定しなかったし、単にセックスだけしてる感じだった。本当は自分をさらけ出す関係をつくりたかったんだけど、まずベタベタしたかった。

されてる確認をしたかったところがある。することで相手が私を必要としてくれてる、というのを感じたいっていうのかな。

野沢 私は逆。つきあってて暗い夜の海に連れて行かれたりすると、「あ、この人はセックスがしたかったのか」って、全然違う目で相手を見るようになってしまう。だから逆なんですよ。セックスすることによって愛されると思うんじゃないくて、ただセックスしたかったんだと思ってしまう。

木本 愛されてるというイメージが違うんじゃない。

木田 私、両方あった。してる最中は相手の関心が私に集中してるし、いろんな意味で向かいあってる気がするから、それでセックスしたいと思うのと、一方ではもしかしてこの人はセックスの時以外は私に関心がないんじゃないかという不安をセックスで解消しようとするのと、順ぐりになってみたい。

野沢 そういう不安をセックスで解消でき

木田 その一瞬はね。その状態がずっと続けばいいんだけど、終わったとたん「じゃ喫茶店行こうか」と言われるとコノヤローと思うね。それでまた自分に関心注いでる状態にしたいからセックスする。

野沢 あっ、ちょっとわかった。私は頭でっかちな人間で、自分の肉体を自分の一部だと思てないのかもしれない。セックスの時も私にはなく、私の肉体に注目してる、本当の私はそこにはいないという気持ちがあるのかもしれない。

司会 モノとして扱われてるっていうこと？

野沢 というフェミニズムばくってイヤなんだけど、自分の肉体を肯定しきれないのかもしれない。

司会 それは、こっちが気持ちよく感じるかどうかにかかわってこない？

野沢 やったことないからわからない。

司会 自分がのれればフィフティ・フィフティだけど、片方だけが欲望の処理のため

用されてるだけと感じてしまうよね。

野沢 気持ちいいっていうのは、たとえばオナニーして気持ちよくても、肉体の気持ちよさを自分が自分の一部としてキチンと認めてあげられていない、劣等的な部分だと思ってるところがある。私、昔すごく太ってたから、ブスだっていうコンプレックスでいっぱいだった。それが十数キロやせて、私の外見をいいと言ってくれる人が出てきたんだけど、それを信じてないのね。**木本** 私は自分の体をすごく信頼してる。性格がいいとか言われるよりルックスが好きと言われる方が受け入れられる。自分の性格というか、自分が好きじゃないから。私はずつと装って生きてきたのね、家でも外でもいい子ちゃんだったし。だから相手がいいって言うってくれても「アンタどこ見てんのよ」みたいなところがあった。

司会 本当の自分を見てほしいってこと？
木本 うん、事の起こりはなにかというと、受験なんだよね。中学の時、先生が、女の子は色気づくとかダメだって言ったと聞くと、

受験が終わるまで人を好きになっちゃいけないんだと真剣に思ってた。気になる男の子にも近よらなかつた。その人は高三の時自殺しちゃったのね。大学に入って好きな人ができて、その気持ちに気づいたとき、もう、人を好きになってもいいんだと思っ

て、すごく解放された気持ちになつた。

野沢 教育の中で、頭のいい人がいいというすり込みがでちゃって、男の人を好きになる時も、性格よりも頭のいい人なのね。そういう美意識だと自分も頭のいい女になりたいというのがどこかにあって、それとセックスするというのが相反するということか。セックスしてる時の女って汚い言い方をされるでしょ。職場で昔、私から見れば頭の悪い上司に言われたんですよ。なんだかんだ言っても女なんて寝てしまえばアヘアヘ言ってる同じなんだって。セックスするのとて同じところに引きずりおろされるみたいな感じがあって……。

木田 私もあった。セックスしてて自分が気持ちいい時、たとえばA Vの女優さんた

ちが悶えたり大きな口を開けたりするような表情は絶対に自分はやるまいと思つた。一同 わかる！（笑）

木田 ゼツタイこれやったら自分がバカに見える、すごいイヤだなんて思つた。最近はずっとまあいいかと小出しにしてるけど。

司会 そんなにA Vに詳しいの？

木田 ラブホテルいくと三本くらい有線にかけてるでしょ、それを行くたびに見てた。**木本** 私も旅行に行った時、一人でホテルで見た。ストーリーもなくて、ただ女の人が出てきてセックスするだけのヤツだったけど。

司会 お金出しても見たいようなのはありますか？

高山 女の人が無理矢理やられてる以外なら楽しんでみれちゃう。無理矢理泣きながらなのは一番イヤだから。「ヘンリー&ジェーン」という洋画は、女性二人と男性一人の三角関係なんだけど、女性二人のからみのシーン見た時はコレダ！と思つた。

映像でコーンするのってあまりなくて、文字だね。『インターコース』とか、こんなのでコーンしていいんだろうかと思っただ。

木本 珍しいね、アンドレア・ドウォーキングの『インターコース』で？ 高いから立ち読みしかしてないけど。

高山 『インターコース』というのは、ポルノグラフィイがいかにも性差別の表現で、性差別を強化するためにあるか、つくられたものであるかというのを収集してる本で、ポルノグラフィイがいっぱい出てくるわけ。

そのポルノがいいんだ、これが（笑）。

木田 ドウォーキングがいかにもイヤらしいポルノを見つける審美眼にたけているかというヤツね。

野沢 石坂啓の「マネームーン」というマンガに、女の子がポルノをつくるっていうのがあって、ああいうのならないかなと思っただけ。男向けのは直セックスだけでしょ、そうじゃなくてセックスの周辺だけならいいのかなあ。

高山 私、女の子が出てきたらダメ。男の子だけ映してくれるんならいい。きれいな男が唇をよせてきたり、自分に向かってくるの。

野沢 いいですね。いまのポルノって男役にお金をかけてないからいい男がいらない。

高山 見る自分より劣ってる男じゃないとダメなんだって。自分のファンタジーの邪魔になるんだって。

野沢 だとすればポルノにカッコイイ男が出てくるはずがないよね。

木田 代々木忠はカッコイイ男つかってる。

司会 あ、『密教昇天の極意』とか『性感×テクニク人妻』とか『プラトニクアニマル』とか？ 観たいと思って、メモはしてるんだけど。彼のセックスのとらえ方って面白そうね。

木本 池上千鶴子が彼にインタビュしてるのがあって、その中でも言ってるんだけど、どういふふうにな女の子に自己崩壊を起こさせるか、それをセックスで「イク」という経験だととらえていて、それを起こす

ことを共同作業でやっていると言っている。セックスってそんなすごいものなの。
野沢 こんど、その監督とか、良さそうなAVをみんなで観る会をやるうよ。





私の

本棚から

河村ふみ

中村泰子

★『愛のヨーガ』（R・V・アーバン著 片桐ユズル訳 野草社）

第一章から第四章までは、性的な抑圧がいかに子供の成長を損なうものであるか、その事例と正しい「性教育」の必要性が説かれていく。ここでいう「性教育」は、一般にイメージされている「性教育」とはちよつと違う。五章に出てくるあるアラビヤ人のカップルの不思議な体験とニューギニアのトロブリアンド島民の話は興味深い。

以下、引用が多くなるが、

「妻とわたしは一時間、裸でベッドにねて、からだをびったりくっつけて愛撫しあっています。性交はしてませんでした。部屋はまっ暗で、あかりは全然ついていませんでした。何も見えませんでした。それかわたしたちは離れて立ちあがりました。」

すると妻の姿が見えはじめたのです。彼女の輪郭は青緑色で神秘的な光の後光でふちどられ、それは彼女から発していました。それは後光に似ていましたが、ちがうのは頭のまわりだけでなくからだ全体をかこんで、輪郭がぼうっと見えました。彼女がそこに立ったので、わたしはゆっくりと彼女の方へ手をのばしました。わたしの手のひらが彼女の胸から二・五センチメートルに近づくと電気の火花が彼女からわたしに飛ぶのが見え、聞こえ、痛かったのです。二人ともちぢみあがってしまいました」。

アーバン博士はこの話の電氣的側面に注目し、以後二週間、このカップルは忠実に一連の実験をおこない、詳細にわたって博士に報告した。それがもとになって性交のメカニズムについての全く新しい考え、性交によつて、二つのからだの異なった生体電気が結合し中和されるのではないかという説が生まれた。彼らの実験によれば、この火花が飛ばない状態（中和）になるには、最低27分間の性交が必要だった。また、接

触の時間が長ければ長いほど深い満足感もたらされ、次に性交の欲求を感じるまでの期間が長くなった。これは、性交なしの長時間にわたる肉体的接触によつても同様だった。これの意味するところは、通常の男性の射精で終わる性急な短時間の結合では、生体電気が完全に中和されることがなく、むしろ刺激によつて負荷が多くなってしまふので、これが次のセックスを駆り立てる要因となる。完全に中和され、深いリラクゼーションがもたらされれば、次の帯電まで時間がかかるといふわけだ。

後者のトロブリアンド島民の話というのは、「南太平洋の原住民たちは何時間も赤ん坊の肌を手でこすってあやす。たいいてい母親は赤ん坊を裸の背中におんぶして働き、赤ん坊は緊張がなく、幸福でいる。これは、おんぶの肌の触れ合いと、その電氣的平衡が緊張をゆるめるのではないか？」

また、「思春期になると女の子は家をはなれ、別の小屋にうつり、そこで自分で選んだ四人の男の子とねる——一人六カ月ず

つ。こうした二年の試験期間のあとで、いちばんリラックスできた男の子と結婚する。こうした結婚は幸福で、不貞なしに一生つづく。彼らの愛のいとなみは、普通多くて五日以上は性交しない。他の夜は一緒にだきあってねて、性器どうしは触れあわさない。性的結合のための準備は少なくとも半時間かける。彼らは愛撫し、だきあい、キスし、噛みあい、二人が帯電するまでつづける。しかし絶対に男は女のクリトリスにさわらない。性交が始まると彼らは結合したまま、少なくとも半時間、ときにはもっと長時間にわたって、動かさずに、横たわっていてからでないと、いかなる動きも始めない。クライマックスのあとでも彼らは長時間にわたって結合したまま横たわっている」。これらのことに関しては、ラジニーシも★『セックスから超意識へ』（ラジニーシ和尚エンタープライズジャパン株式会社）の中で、アーバン博士と全く同じことを語っている。そして、ラジニーシは、瞑想としてのセックスを説く。

「意識しているいないにかかわらず、生とは、エゴのない状態、時間のない状態に向かう絶えまない努力だ。（中略）時間を超えたものと一つになりたい、純粹なエゴのない状態を得たいという欲望だ。世界がセックスの軸のまわりを回っているのは、魂のこの内側の欲望を満足させるためだ」。「私の推測では、人間は、サマーディ（三昧）の最初の輝く一瞥を交合のあいだに得た。人は、交合のときにのみそのような深遠な愛を感じることが可能であり、そのような光輝に満ちた至福を体験するのが可能だということに気づいた。もし意識の思考のさざ波をはかの方法によって鎮めることができるとしたら……ここからヨーガのシステムが発達した。ここから瞑想と祈りが生まれた」。より少し詳しく研究したい人には、★『タントラ』（ラジニーシ 和尚エンタープライズジャパン株式会社）をお薦め。二種類のエクスタシー、一つはいわゆる射精で終わる通常のセックス、もう一つはタントラのセックスについて。「前者では絶

頂に達するとエネルギーは失われ、衰退し、そして虚脱が訪れる。それをリラクゼーションと見なすこともできる——だが、消極的だ。タントラは、積極的な、より高いリラクゼーションの次元をもたらす。パートナーたちは、双方が互いに出会い、互いに生命エネルギーを与え合う。ふたりは互いに生を与え合い、生を更新し合う。エネルギーは全く失われない。むしろ、さらに獲得される。異性との接触により、すべての細胞は挑発され、活性化するからだ。そして、絶頂に導かれることなくはじめにとどまり、熱くならず温もりのままにとどまり、その興奮のなかに溶け込んでゆくなら、ふたつの温もりは出会うだろう。この行為は、きわめて長く引き延ばすことができる。射精することなく、エネルギーを捨てることがなければ、それは瞑想になり得る」。私は、男が射精を目的とするセックスは本質的に強姦だと思っている。してもいいし、しなくてもいいと考えられたら、男だっただけで楽になれると思うのだが。（河村）

★『ティーンの中からだ・こころ・愛(上・下)』
(S・シュナイザー著 ビルギット・リーガ
ー画 北沢杏子 孝子・ツエルセン 訳
アーニー出版)……90年にドイツで出版され、
ベストセラーになった10代のための性の本。
体の変化から、マスターベーション、避妊
はもちろんのこと、親との付き合い方まで、
押さえるべきことはきちんと押さえながら、
「性」とどまらず、「どう生きるか」という
ことへのメッセージが伝わってきます。ま
た、女性的な視点が貫かれているのに、
「これだったら男の子にも負担にならない
だろうな」と好感をもちました。イラスト
も楽しく豊富ですから、中学生ぐらいから、
その時々自分の悩みや関心に合わせた読
み方ができそうです。

★『わたしのからだよ! いやなふれあ
いだいきらい!』(ロリー・フリーマン著 キャ
ロル・ディーチ画 田上時子訳 木犀社)
……子どもを性的被害から守るための絵本
ですが、大人が子どもを守るのではなく、
子供が自分自身を守るという視点で書かれ
ています。わたしのからだはわたしのもの。
気持ちのいい触れ合いと、いやな触れ合い
があることを、子ども自身に気づかせるこ
と。いやな触れ合いの時、いやとはっきり
伝えようと教えています。三歳から小学校
低学年向き。(☆教則本もあります)

★『ライオンさんにはなそう いやなこと
があっただけはなすのがこわいのー性的虐
待を受けた子どもたちのために』(パトリ
シア・キーホー著 キャロル・ディーチ画
田上時子訳 木犀社)……性的虐待を受け
た幼い子供達のあやうい自我を回復させる
ことを目的として、打ち明ける勇気を与え
たり、回復を助ける考え方を教えてくれま
す。(☆教則本もあります)

◆「男のセクシュアリティ」の座談会のテープ起こしにチャレンジ。テープを直し始めて、引き受けたことを後悔、驚いたり、戸惑ったりで先に進めない。性に関心を持ち始めた息子が耳を敬っている様子なので、イヤホンで聞くことにしたら、今度は音が近すぎて、耳と頭がボーッとする。次に午前中の静かな時にかけてみたら、響きすぎて、隣にまで聞こえそうで慌てた。60分のテープをやっと聞き終えた時には、クタクタだったけど、面白い経験だった。(有坂)

●私にとって、女という性は疎ましいものでしかなかった。それが、子どもを産むことでようやく自分の性を受け入れられた気がする。だから、妊娠・出産は、私にとって自分の「性と生」を受け入れていく過程だったのだと思う。自分の中のエイリアン、日々変化していくからだところ。そんな自分がいとおしくて、ようやく私は優しくなれた。今でも頭では女は嫌だと思うけど、なんだか疲れている30オトコを見回すと、30オンナはみんな元気だぞーと叫びたくなる。(中村)

♥今月はワープロを打ちながら、『We』の「性」に関する文章を意図的に家のあちらこちらに散乱させることにした。

今まで、家庭での性教育なるものに自信もなく、つれあいと互いに責任を押し付けあってきた我が家においては、多少手抜きではあるが、画期的な方法である。それに、どの内容が息子のレベルにふさわしいかと、つれあいに相談しつつ原稿を読ませてしまうことで、高校生の性教育ばかりでなく、中高年の性の意識改革までできるかもしれない？ (石海)

◆性教育というと、私自身、生殖から切り込む授業しかできない自分におもはゆさを感じていました。人間の性については、生殖から死までの長い道のりがあると思うのですが、人間の死から逆に切り込むことはできないのか。Weのテーマが今月号の性から来月号の死につながっているのは、2カ月にわたって人間の生について考える上で興味深いことです。11・12月号で人間の性についての新しいキーワードを私自身見つけていきたいと思っています。(石橋)

◆今月号の「女の座談会」、司会の必要もないほど盛り上がった座談会でした。Weでこんなに赤裸々な衝撃の告白大会をやってしまった方がいいのかなあと、思わず赤面もしないで、楽しんでしまいました。それにしても、このあっけらかんとした明るさはなんなのだ！ 時代は確かに動いている……。♣書評に書きました『愛のヨーガ』、私は、2人の息子たちが年頃になったら強制してでも読ませたい。もっと早くに読んでいたら自分を異常だと思わなくてすんだのに。(河村)

★トロブリアンド諸島の話にまだこだわっている。少年少女の間で性が解放されているのになぜ私生児がいないのか。子供が欲しいときしか射精しないからでしょ？と、こともなげに河村さん。マリノフスキーの『未開人の性生活』は面白かった。白人の性行為の落ち着いた無さを現地人が揶揄するくだりがあったり、或る文化の中で当然だと思っていることが、よそから見ると噴飯ものだったりという痛快さ。発想の転換のために、これと、『愛のヨーガ』はお薦めです。(稲邑)

くらしと教育をつなぐ—We

Vol. 2 No. 7 1993年11月15日発行

定価600円 (本体583円)

年間購読料/定価6500円(送料共)

発行/Weの会 編集/稲邑恭子 河村ふみ 中村泰子

〒225 神奈川県横浜市緑区市が尾町1161-8

共学舎内 ☎・FAX 045(974)3101

郵便振替 東京3-754314 WE編集室

三菱銀行 大久保支店 普0264724

印刷/(有)イー・エム・ピー 1代目区敷田橋2 5 2



学陽書房

「もうひとつの経済」で、資本主義からオライられるか？
それとも、サクセスゲームを勝ち抜くか？
女の解放と資本主義のきわどい戦いの決着は、いかに？
★主な内容 巻頭対談・資本主義は女性にとって解放的か？ハイゼン・ハートマン・上野千鶴子 女性が市場経済に巻き込まれるとき 東独女性の経験に学ぶ、上野千鶴子 資本主義は女の味方か？ 伊田久美子 インタビュー「細谷重順」 生協は資本主義のウラをかけるか？の奥谷礼子 自由競争こそ女の味方 豊田登信子 コロワシと尚売は両立する。消費者をへんた女たち・大島美樹子 アンケート
女の解放と資本主義 講評対談・岩井克久・上野千鶴子 はか、女の労働組合論。 ●1600円

「もうひとつの経済」で、資本主義からオライられるか？
それとも、サクセスゲームを勝ち抜くか？
女の解放と資本主義のきわどい戦いの決着は、いかに？
★主な内容 巻頭対談・資本主義は女性にとって解放的か？ハイゼン・ハートマン・上野千鶴子 女性が市場経済に巻き込まれるとき 東独女性の経験に学ぶ、上野千鶴子 資本主義は女の味方か？ 伊田久美子 インタビュー「細谷重順」 生協は資本主義のウラをかけるか？の奥谷礼子 自由競争こそ女の味方 豊田登信子 コロワシと尚売は両立する。消費者をへんた女たち・大島美樹子 アンケート
女の解放と資本主義 講評対談・岩井克久・上野千鶴子 はか、女の労働組合論。 ●1600円

- 好評発売中 //
- **エイジズム** おばあさんの意識 樋口恵子 ●600円
 - **ホルノグラフィ** 女と表現の戦場 水田宗子 ●600円
 - **女と表現** オタクと表現の戦場 水田宗子 ●600円
 - **恋愛テクノロジー** 恋愛テクノロジーの現在 上野千鶴子 ●600円
 - **続刊⑨ 母性ファンタズム** 母なる自然の誘惑 加納美紀代 ●1800円

対話 快楽の技術
斎藤綾子・伏見恵明 大人のための性教育!! ケイの伏見恵明とバイセクシュアルの斎藤綾子、いま最も過激な二人がエロスについて徹底して語り尽くす性愛技巧主義のすすめ! ●1500円

「もうひとつの経済」で、資本主義からオライられるか？
それとも、サクセスゲームを勝ち抜くか？
女の解放と資本主義のきわどい戦いの決着は、いかに？
★主な内容 巻頭対談・資本主義は女性にとって解放的か？ハイゼン・ハートマン・上野千鶴子 女性が市場経済に巻き込まれるとき 東独女性の経験に学ぶ、上野千鶴子 資本主義は女の味方か？ 伊田久美子 インタビュー「細谷重順」 生協は資本主義のウラをかけるか？の奥谷礼子 自由競争こそ女の味方 豊田登信子 コロワシと尚売は両立する。消費者をへんた女たち・大島美樹子 アンケート
女の解放と資本主義 講評対談・岩井克久・上野千鶴子 はか、女の労働組合論。 ●1600円

近刊

ピリスキ!

女と資本主義の危い関係



編集 上野千鶴子
食うか、食われるか!

NEW FEMINISM REVIEW

《全6号》

●編集委員 上野千鶴子/加納美紀代/白藤花夜子
樋口恵子/水田宗子

東京都千代田区富士見1-7-5 電03(3261)1111・振替東京7-84240 (価格はすべて税込)

最新刊

シリーズ エイズ・教育・人権

各巻定価 1,000円 (税込)

エイズの授業

中学校・高校で行なった
エイズの授業の記録

北沢杏子 著

●NHKテレビ放映で大反響。中・高校生に向けて北沢杏子が実践したエイズの授業を詳細に収録。

子どもとエイズ

親と子がエイズを
ともに語りあうために

清水 勉・北沢杏子 共著

●アメリカから輸入された非加熱血液製剤からエイズに感染した子どもたちは日本だけでも600人も。HIV薬害訴訟の清水勉弁護士が実情を告発。家庭でエイズをどう語りあうかを北沢杏子が提起する。



アニー出版

〒158 東京都世田谷区用賀3-5-6
TEL03-3708-7321 FAX03-3708-7325



くらしと教育をつなぐWe 1993年11月15日発行 第2巻第7号
定価600円(本体583円 年間購読6500円送料共)
郵便振替 東京3-754314 WE編集室